

《西川忠二氏略歴》

一九二七 - 昭二 - 六月 新潟県南蒲原郡長澤村に、小作

農の五人兄弟の次男として生まれる。

一九四二 - 昭一七 国民学校高等科卒

一九四四 - 昭一九 青年学校卒業

兵役…一九四四～四五 新発田連隊の第二国民兵

《職歴》

新潟での職歴 トラック助手、製材作業、金物の卸商、

ラストック製造企業に働く

一九五二 - 昭二七 九月 上京

同年 一月 明工社入社

一九五五 - 昭三〇 西南合同労組加入

一九五六 - 昭三一 唐ヶ崎工場代表者会議書記

一九五七 - 昭三二 産別会議・全日本金属目黒支部

結成 副委員長

一九六二 - 昭三七 全金明工社支部 副委員長

一 お生まれは？

西川 一九二七年六月、新潟県南蒲原郡長沢村（当時）今

の三条市に五人兄弟の二番目として生まれました。下に双子の妹と弟がいるんです。弟は三条高校を出てから東京に来ています。

一 国民学校卒となつていますが、戦争体験などは？

西川 私の場合高等科一年までが小学校、その後は国民学校となつて、国民学校高等科二年で卒業となり、その後は村立の青年学校に進みます。これは義務化されていた十四歳ですよ。そこで農業と軍事教練を受けたんです。太平洋戦争は国民学校高等科二年の時始まっていて、一八歳になると第二国民兵役という兵役義務があつた。戦争になつてから作った制度じゃないかな。

太平洋戦争中、今の県の畜産研究所に、防空監視哨とというのがあつて、青年学校の生徒が交代で一週間に一回ずつ必ず行きましたよ。二年ぐらい行きました。敵機は音でわかるんですよ。なんていう飛行機か。B二九はもちろん、ロッキードとか何とかさ。直接やられたわけではないけど。長岡の空襲は新潟県では一番の規模だったんじゃないかな。私のところから二〇キロ程もないから、よく見えたんです。朝方、焼夷弾が雨あられと落とされるのがよく見えて、みんな防空監視哨に行ったのを覚えてますよ。

《戦争と冬の出稼ぎ》

青年学校で思いましたんですが、冬場、出稼ぎに行くんですよ。東京の鮫洲のところ、いまの競馬場のあたりの埋め立てのところにね。海に浚渫船を浮かべて、パイプで海水と泥をくみ上げて埋立地に流し込んでいたんです。南浜川町ですよ。「向う側が鮫洲だよ」と教えられています。浜川町辺には海軍の衣料廠というのがあって、婦人労働者が朝二千人位橋を渡って来るんだ。捕虜なんかと一緒に。

一そのとき教練は？

西川 当時青年学校は義務教育だった。私なんかの時はそんなにたくさんいた訳じゃないけど、一五人から二〇人が夜南浜川町小で教練を受けた。銃剣術の指導を私らがやらされた。将校がついていた訳ではなかった。「学生証」を持って出稼ぎに来ていた訳で、金はもらったよ。二冬行った。

それから兵役の方では、私の友達、部落二七軒の内の六・七人が志願して征ったんですよ、私は目が悪かったんで征けなかった。

一そのほか戦争で覚えていることは？勝つと思っていまいたか？

西川 支那事変は小学校四年、南京陥落では学校で絵を描かされたことを覚えてる。勝つと思っただけか、開戦

後しばらくはどこでも、勝った勝ったでしたね。大東亜戦争は高等科二年の時で、一二月八日の真珠湾のことはね。家にラジオなんかなかった。ラジオを持っている家は部落では何軒もなかった。

《一四歳で就職》

一職歴の方は？

西川 国民学校を出るとすぐ就職で、村にあったベントナイト（鉱石）を作る会社に入りました。戦争中で、石鹼なんか作ってた。それから藤田製作所へ、枕木、鉄道だね。戦後は三条の町の八重咲商会、金物の卸の。ここは面白いですよ。一ヶ月に一回は富山から高山線で奥飛騨、犬山城あたりを通って名古屋へ出る。さらに伊勢志摩の方へ行って、金物屋を廻って注文を取って、それを三条から送って、一ヶ月後に集金する、というのを四九年までやった。それで俺はいろんなことを知ったんだ。名古屋だとかね。あの頃はまだ戦災孤児がたくさんいて、弁当におにぎりなんか持っていると、みんなが寄ってきてね。それから三条のマサノ合成所に入って、プラスチックを製造するところね。

その後五二年に東京へ出て来て、職安の紹介で明工社に入ったんだ。

《先ず農民運動で活動開始》

一戦後すぐのこと、たとえば二・一ゼネストとか？

西川 一番印象にあったのは二・一ゼネスト。まだ新潟にいた頃で、「アカハタ」が三日刊か五日刊の頃だったんですが読んでましたよ。その後「休刊」になるんですが、一それでは上京前に新潟で「アカハタ」を読み始めたんですか？

西川 そう、農民運動をやるんですよ、農地解放で。家は小作農だった。一町二反五畝、畑が二反ぐらいでね。とにかく地主の住まいの家屋と宅地以外はすべて小作に解放された。それまでは毎年米が五十から六十俵採れたけどその半分を年貢で持っていかれちゃう。持って行かれるというよりこっちが地主の蔵に運ぶわけよ。家の場合俺が高等科一年か二年の頃の十一月、親父が三六歳ぐらいで死んだんですよ。朝起きたら死んでたんですよ。そんな訳で、兄弟はみんな学校から帰ると、作男として行くんですよ。

妹は、子守だとか女中なんかで出ているんです。私はず前に話した通り就職して、作男には出ませんでした。一小作地はどうなったんですか？

西川 地主は三軒隣にいて、関東大震災で歯医者で大もうけした有名な大竹という人だった。俺たちは自分らの食い扶持もないのに収穫を持っていかれる訳で悔しい思い

をしていたんだ。それで上からの農地解放と合わせて農民運動を兄貴なんかと農民組合を作

って、一緒にやるんだけど、だんだん考え方が違ってくる。こっちはびた一文持っていないえ訳だし、兄貴は田圃が自分のものになっていく訳だ。

違いが鮮明になって、こっちは「アカハタ」読むようになる。また青年共産同盟にも入る。だから東京に出てくる前にもう基礎はできてたんだよ。唯物論も資本論もぜんぶ一応読みました。良いも悪いも判ってたんですよ。一誰か勧める人がいたんですか？近くに？

西川 仲間が東京に出てきて、最初に宿になった吉田って言うのが居るんだけど、昔の落人の後裔の息子ですよ。それが戦後の福井震災のとき、今というボランティアをやって、帰って来てからいろいろやりだし、ソビエトから帰ってくる人たちを迎えに行ってた。

一その人は共産党員だったんですか？

西川 党員ではなかったね。「アカハタ」が「休刊」になり「平和と独立」なんて言うガリ版刷りのが、俺のところまで来た。長澤村には細胞がなかったんですが、吉田一人だったし、ソ連に抑留された人がいたかな。だけど戦後第一回選挙のとき、二四票も共産党の票が出たんですよ。三条に働きに行くじゃない、するとあそこはちゃんとした

細胞がある訳で、有名なお米屋さんの吉田兼治っていう人（通称ヨシカネさん）が市議会議員をしていた。その事務所に行って、本を買ったりしてましたね。そんなことで東京に来て、いきなり組合を作るということではなかったんです。二・一ゼネストや「アカハタ」には賃上げとか婦人労働者とかが出ている訳で、それを見ながら「ようし、俺も出て行って何とか」ってなるんですよ。

《兄貴から米の援助》

東京に出て行く時には「結婚するまで一年に米四俵よこす」と兄貴が約束してくれた。それで上京後は毎年秋になると向こうに住所を移動するんですよ。あの頃は食糧管理法があって「供出」が厳しいから、四俵を「保有米」として取って、それからまたこっちへ住所を移すというのを、結婚するまで繰り返したんです。二五歳でこっちへ来て三三で結婚するまで八年間続いたわけ。最後は四俵もなかったけど。弟も鷹番に来てたからね。

一当時としては助かりましたね？

だから鷹番の乾物屋さんに、一〇キロ位持つて行って、買って貰い小遣いにする。田舎の米だから美味しいし、そういう生活でした。

《明工者に入社 西南合同労組で活動》

一朝鮮戦争の最中の五二年に出てきた「やるぞ」のつもり

で？

西川 そう、そういう覚悟で。

一明工社に入って西南合同労組と関係する経過は？

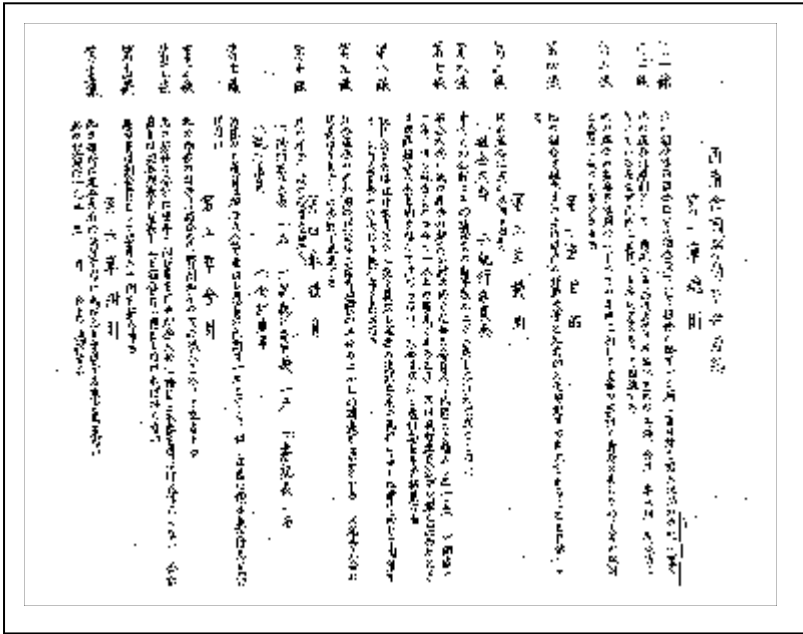
西川 明工へ入って間もなく、きっかけはちらしたったか飲み屋だったかはっきりしない。塚田という友達を連れて行ったりした。川瀬さん、山本（吉人）さんなんかがいてね。「町工場」という機関紙を受けとったことがあります。

「町工場」は目に焼き付いていますよ。その頃のこと覚えてるのは、合同労組もそうだけど、工場代表者会議一工代会というのがあって、太陽産業だとか、唐ヶ崎にあった××歯車とかが参加していました。

一山本さんから合同労組は五〇年から五一年にかけて、活動を渋谷から目黒に移したと聞いていますが、どんな活動をやったんですか？

西川 その通りじゃないですか。事務所は唐ヶ崎の朝鮮総連の事務所の中の狭い部屋でした。活動はあんまり覚えてない。さっき言った工代会議を呼びかけたことかな。碑文谷地域ということ私の部屋に、太陽産業とか、長谷川製作所？とか四つか五つの町工場の労働者が集まっていた、私はその書記になっちゃたんですよ。それが五六年でした。（西南合同労組規約＝資料①）

【資料①】
西南合同労組規約



一そのころには都委員会から派遣された川瀬さんは活動していたんですか？

西川 いましたよ、目黒に来た経過はわかりませんが、都委員会から派遣された川瀬さんのこと。品川の市川さんのお話では、都委員会の物販で南部を回っていたとのことです。物販をやりながら、目黒での活動もやっていたのではないかとのことでした。労組で専従費が払えるとも思えないんでね

西川 とにかく裕福な生活はしてなかったですよ。私のところに来て会議をやったんだから。会議には四郎丸さんも来てましたよ。住んでいたのは林業試験場の近くにあった都営住宅じゃないかな。明工社のすぐ近くでした。
一西川さんは五六年に西南合同労組に入っていますが、共産党にはいつ？

西川 五七年五月一日です。それから共産党目黒地区委員会編纂の「社会進歩と革命をめざす目黒でのたたかい」を見て思い出しましたよ。西南合同労組は五六年に解散していくんですよ。

《全日本金属目黒分会結成》

その一方で五六年一二月に、金子健太さんが中国から帰ってきて、「金属の個人加盟の組合を作るんだ。それが本物なんだ」と。それまでは合同労組はあったけれど、金

属の産業別の組織はなかった。そして五七年七月に、唐ヶ崎、碑文谷地域と洗足方面で活動していた活動家が合流し、吉田兼治さん宅に二〇名ほどが集まって、全日本金属労働組合目黒地域分会が結成された。委員長に北野（貞夫）さん、副委員長に私・西川。そして書記長に中西さんが選ばれた。そのときに全日本金属の本部から来てくれたのが西村直樹さんで、今でも年賀状のやり取りはしますよ。

そのほか、大石橋交番前から東横線の第一師範駅(現学芸大学駅)の方に行く道に面して、「朝日ノーヒューズ」という三〜四〇人の工場があって、そこに藤井君というのが入って、私の弟も入り労働組合を作ろうとして活動したこともあるんですよ。

一それは合同労組の頃ですか？

西川 いや、全日本金属の分会ができてからかも知れない。

朝日ノーヒューズは、その後中目黒に移転しましたよ。

一その頃の明工社の状況は？

西川 労働基準法なんか関係ない、無茶苦茶でしたよ。私の職場では「個人受け取り」隣の松ちゃん松本利夫、後に明工社支部の委員長)の職場では「連合受け取り」という出来高払いの賃金だったんです。ポ一ナスがある訳でなく、「寸志」の形で封筒に千円札が一枚か良くて二枚。

一西川久仁夫さんや北野さんは？

西川 久仁夫さんの入社は私より一年早く、中学を卒業してすぐだったね。

《北野さんと意気投合》

北野さんは公務員の職場でレッドパージされ、明工社の下請けの仕事をしていた。北野さんと私が知り合ったのは、私が鷹番に住んで何日もたつてない時、鷹番小学校でやった共産党の演説会に行つたときです。参加者は三〜四人位かな、そこで北野さんが司会をやつていて顔を覚えた。その翌日の晩、風呂屋の洗い場で隣同士になつたとき、夕べ見た人だと思つて声をかけたんですよ。そうしたら何ていうことはない、私が住んでいるアパートの2階から道路をはさんで目と鼻の先の一軒家に住んでいたんですよ。両親と兄弟が一緒でした。北野さんの部屋にはいろんな人が来ていて、麻雀なんかやって私も顔がつかつた。駒場の学生たちも来ていた、その中で医者になつた人もいましたよ。

《明工での組合作り》

一明工の組合作りはどんな具合でしたか。五八年二月に全金属と全日本金属が合併し、東京電波工業の西山さんを委員長にした全金属目黒地域支部が結成され、中西さんたちが品川地域支部を作つた。その経過の中でなぜ明工社が独

立支部になったんですか？

西川 五六・七年頃に組合作りの声が上がリ、目黒と川越で組合を作ることに賛成する署名が四百名分も集まっていたんです。そのとき私が、共産党の政治学校に行ったことがばれていて、会社に呼び出された。政治学校に参加したとき、西川と記帳した字が崩れていて、升川と読めたらしい。公安からその名前でも知らせが入ったようでした。スパイが入っていたんですね。会社は首を切らずに懐柔の手に出てきて、私に従業員の親睦組織(明工会、六〇〇名)の会長職をあてがい、手当ても上げてきた。

この時期地域のサークル活動が盛んで、目蒲映画友の会(良い映画をより安く観る会)が二〇〇人、そのうち明工社だけでも一〇〇人はいたんだ。私が副会長でね。座談会に、家城巳代治監督が来たこともある。それと鷹番コーラス。過半数が明工社だった。日本光学の佐藤秀太郎さんが若い人たちを一〇人位どさつと連れて来たりしてね。佐藤さんはニコンの教宣部長をやっている首切にあつたんですよ。委員長、副委員長と彼の三人。私より一回り若くて、今は太子堂にいます。

目蒲映画会は太陽産業の沢田さんの紹介で、鷹番コーラスは私が所属していた五本木細胞の堀沢さんに誘われた。コーラスでは目黒警察にやられたこともある。五本

木小学校で、今プールがあるところに雨天体操場があつて、日曜日にそこを借りてやっていたんですよ。そうしたらどんどん集まってくる、丁度小雨が降っていた時、警察が来て「これは無届集会だ」と解散を求め、私を警察へ連れて行つた。学校側は貸してくれたんだから良いと思つていたんだけど、目黒警察が来たんだ。

一そのときは説教されて帰された？

西川 そう。無届集会と言うから、しょうがないわね。警察は「梶山(明工社役員)がどうのこうの」と言っていたから、会社から「あのサークルを何とかしてくれ」と言われていたんじゃないかな。

組合ができる頃はそんな状況でした。その後、私が胸に水がたまる肋膜炎を患って入院した。水を抜くたびに熱が出てね。水を取らない日に北野さんとか清水さんが来て活動報告をしてくれた。先に川越工場でも組合ができて、こつちはどうするか相談したんですがね。結局地域支部の分会にならずに、独立支部になったんですよ。

一川越にできた組合は企業内ですか、全金ですか？

西川 一般合同労組だったんじゃないかな。この前新聞に、中心になった湯浅さんの訃報が載ってたけど。五七年の三月にできて、八月に目黒と合同で要求出して、団体交渉をやるんです。目黒はまだ組合ができてなくて、私が

明友会の会長だったから、団交には私が出た。
—それまで川越とは連絡がなかったんですか？

西川 いや、あったんですよ。向こうの合同労組の書記をやっている男の人と女の人（副委員長をしていた）が、二人でこっち（目黒）の門前で待ってたんですよ。詳しく言うのと、かつて川越から五、六人屈強の若者が仕事を習いにこっちへ来ていたんです。向こうで同じ仕事をやるんで六ヶ月位。それで顔見知りだったんですよ。そういうことで、俺が組合作りをやっているということが伝わっていたんでしょう。会社との交渉には明友会の会長として出て、堂々とやりましたよ。新井さんが「よくあの時期にあれだけ言ったね」と今でもよく言います。

—その後入院？

西川 そう、できる手前で。門前に来た女性にはこちらの情勢は話してある。準備は進んでいる。何人が集まっていることなんかを。

—組合が動き出して会社と労働者の反応は？

西川 まあ、なかなか微妙なところだった。西川久仁夫、彼も組合を目指してただけど、こっちは事前に話してなかった。僕は入院していたし、磯貝・北野さん他五人位で明工に細胞ができていたけどね。久仁さんにはまだ話してなかった。それでへそを曲げちゃった。北野さんな

んかが相当苦勞したらしいですよ。でも彼（西川久仁夫）が初代委員長になったんだから、こっちは病院で寝たりなんですからね。

—共産党の南部政治学校とは？

西川 哲学なんかやってましたよ。川越の組合ができる前ですよ。

—最初のストライキはいつ頃ですか。前田さん（目黒地区労務局長一当時）に聞いた話では明工ではストのとき竹矢来を組むんだとか？

西川 組合ができてすぐ賃上げで、春闘が始まる頃です。竹矢来はね、丁度その頃は昔の蒲鉾兵舎の材木が北門の所に置いてあったんだね。その材木を使って門を塞いだ。竹棒を加え、竹棒には鉄条網（有刺鉄線）をからめて、何でそんなことをしたかというところ、下請けに変なのがいてさ、怒鳴り込んできたりいろいろやるんですよ。だからあそこ、この門は物々しかったね。

—北野さんの首切は？

西川 彼は私の職場だったんですけどね、臨時で入ったでしょう。もう一人臨時の人がいて、この二人を「辞めてもらう」と会社が迫り、かなりもめたんです。最後は支部がスト権を確立して撤回させたんです。五九年ですよ。おれが警察に連行されたこともあるし、北野さんあたりが

一番狙われたんでしょ。

—その首切で、前田さんの話では、あるオルグが北野さんに「あんた諦めたほうがいいよ」といったというんですが真相は？

西川 誰だろう。全金の本部か、西村さんではあり得ないから、どっかの企業支部幹部かな。

藤井 それから祐天寺駅の近くに明工社塗装部というのがあったのは？

西川 はいはい、私が行ったことはないけど、配電盤・分電盤をやっていたところで、松ちゃんの職場の関係ですよ。

藤井 五九年か六〇年に、あそこで闘争宣言を張り出していたのを見たんですよ。ずいぶん励まされました。

西川 みんなどこでも盛り上がっていたね。(目黒)不動さんから二六号線に出るまでに、七つ位赤旗が立ったんですよ。〇〇セメント、NHKの寮があってその前にもあったし、共和無線、泉工業の角にも、人は何人もいなかったけど。

—エスエス製薬とは？

西川 はい、年がら年中ね。お盆には盆踊りやったりね。鷹番コーラスも名前を変えて続いたんですよ。

《藤井将貴氏略歴》

一九三三 - 昭八 東京に生まれ、旧蒲田区矢口渡で育つ。転居三回。

一九三九 - 昭一四 矢口小学校入学、以後神奈川県藤沢市、宮崎県広瀬村、同宮崎市に転居、転校。

旧制宮崎中学校入学

一九四五 - 昭二〇 同年 八月 敗戦

東京都立小山台高校定時制入学、この間二回転居、転校。

一九五三 - 昭二八 法政大学短期大学部入学（夜間）
一九五五 - 昭三〇 同大学工学部に編入、五七年卒業。

《職歴》

一九四九 - 昭二四 同年十一月～ 武蔵小山の町工場

五一 - 昭二六 一月 東京工大金属工学研究室
一九五一 - 昭二六 一月～

五三 - 昭二八 十一月 目黒電波測器（株）技術部

一九五四 - 昭二九 一月～ 目黒電波測器の下請けで働く
五七年三月

一九五七 - 昭三二 三月～ 東京航空計器（株）で働く。同
五八 - 昭三三 一二月 支部（全国金属労組）に加盟。

一九五九 - 昭三四 一月 目黒電波測器（株）に再入社、
技術部に所属。

一九九二 - 平四 八月 目黒電波測器倒産

《活動歴》

一九六〇 - 昭三五 目黒電波測器従業員組合委員長。
一九六一 - 昭三六～ 労組への規約改正後、同労組書

六七 - 昭四二 記長。（ただし、六二年九月～六
三年八月を除く）。

一九八五 - 昭六〇 九月 解雇、同労組被解雇者団長（一
年で職場復帰）。

一九九二 - 平四～ 倒産、東京争議団共闘事務局次
二〇〇六 - 平一八 長、同副議長

一先ずは組合活動に取り組む以前で印象深いことをお話しさ
い、戦争体験のことになるかと思いますが…

藤井 一九三三年生まれですから、その二年前に満州事変、
一年前には上海事変の肉弾三勇士とか、五・一五事件が
あり、生まれるちょっと前に多喜二が殺され、ヒトラ一

が国会焼き討ちをするなどありました。そういう時期でしたから、最初の十二年間は戦争なんです。シナ事変から戦争が連続したのだけれど、子供の頃はその前も戦争をやっているものだと思います。

生まれは蒲田区（現大田区）の矢口で、一九三九年に矢口小学校に入りました。この小学校では七月七日は七夕ではなく、盧溝橋事件（一九三七年）の日という状況でした。三九年の秋には、皇紀二六〇〇年に向けて、校長が教育勅語を「奉読」した後に歌う「勅語奉答の歌」というのが、それまでのものより難しい勝海舟作詞のものに変わっていくんです。

《鵜沼へ》

藤井 一年生の二学期が終わった日に、鵜沼（藤沢市）に転居しました。三学期から藤沢第一小学校。そして二年生から三年生になる時に、小学校が国民学校になりましたが、とたんに「蛍の光」は歌わない、という風に変って行くんですね。藤沢ではじめて気がついたのは、貧民部落みたいところがあることです。自分たちと違った生活をしている人たちがいて、その子供たちも学校に來ている。朝鮮人については、矢口にいた時にとくに感じたんですが、多摩川の土手の下、外側のね、そこに戸板を集めたような小屋を作って住んで居て、頭の上に風

呂敷包みを買って歩いていた。「その人たちが震災の時、火をつけて火事にした」と聞かされたけど、後日親父に、「そんなことを言うもんじゃない、ウソだ」と叱られたんです。藤沢の学校では同級生に一人、朝鮮人がいて、三年生の時名前が変わった。「創始改名」ってやつですね。

三年生の一二月に、昼休のあと、急に校庭に集められて、「イギリス、アメリカと戦争をやる」ということを知らされた。それまで「日本が世界で一番強いんだ」と教わっていたのに、その時は、世界で一番強いのはイギリスとアメリカで、そこを戦争をすることになった、と言われ意外に思ったんですね。その翌年にはもう空襲、四月一八日ですね。土曜日で僕は学校から帰る途中で、空襲警報の半鐘がなったんですけど、防空演習だと思った。家に帰ったら隣の家（二階建）の屋根すれすれに飛行機が飛んでいった。丸の中に星が書いてあるマークだった、ということをお母や弟が話してくれました。

《宮崎県へ》

藤井 太平洋戦争が起こって、半年後の七月一日に鵜沼を出発して、宮崎県の広瀬村（現宮崎市佐土原）と言う、宮崎から三里北の農村に引越したんです。お袋の実家です。親父の仕事の都合でね。そこで四年生から五年生

になると、僕は先生の指名で副級長にされた。それまでも、とかく「よそ者だ」とか「生意気だ」とかいうのが居て、それが副級長になったものだから、一層憎らしくなったらしくイジメがひどくなった。イジメの首謀者は教頭の三男坊で、僕の友達に「あいつと遊ぶな」と命令したりとかく毎日のように誰かが僕に暴力を振るう。

こつちも黙っていじめられている訳には行かないから、殴られたら殴り返していたんだけど多勢に無勢。そうすると受持ち（担任）の教師が「藤井は和の力がない」と一方的に僕を悪者にして、いじめる側に免罪符を与えた。

僕がいじめられていることは家では話さなかった。いじめは兄貴にもあった。兄へのイジメはさらにひどく、親父が引越しをして宮崎に行って学校を替えようとしたけれど、兄の場合中学（旧制）の受験が迫っていて替われない、結局僕の五年生の三学期は、六年の兄と一緒にバスで広瀬村に通ったんです。六年になって宮崎の学校に転入してやっとイジメから解放された。そこではいじめはなく、「和の力」がなかった訳ではなかった。

いじめられたお蔭で、僕はいじめを誘発しないように心掛ける、あるいは目立たないようにする、そんなことが五年生の頃から身についた、防衛本能です。一種の事なかれ主義かな。反面、他人のこともいじめに対す

怒り、いじめを許さないという心は今でも変わりません。
《中学入学と戦争に対する疑問》

藤井 敗戦の年の三月に国民学校を卒業しました。米軍は沖繩に迫って来ていて、空襲を恐れ、在校生は五年生の一部だけ参加というささやかな卒業式で、「蛍の光」に代わる「花かをる」という前年にできた歌を歌いました。この歌はあまり知られていません。「海行かば」（当時国歌）を歌ったところもあるそうです。

中学に入って、授業はほとんどなく、海軍の飛行場（現宮崎空港）の建設工事や、農家の手伝いなどの「作業」をやらされた。それに九州は沖繩からやってくる米軍機の空襲がひどいので、空襲と作業の両方で学業はほとんど進まない。五月一日にね、丁度下校するときに空襲警報のサイレンが鳴った。それも急に。空が曇っていた。曇っているときの空襲は怖い訳ね。飛行機がどこを飛んでいるか判らない。そこで爆弾が落ちてくるからね。ザ一という爆弾の落ちる音が不気味なんですよ。海岸に波が打ち寄せるような音。駆け足で帰る途中そのザ一という音がして、見たら目の前に黒いものが上から下に向かって、もう訓練どおり耳と目と鼻を押さえて伏せたんです。しばらくして爆音が聞えなくなったから起き上がったら、黒い煙が上がっていてね、師範学校がやられたんだね。

爆弾が幾棟かの校舎のうちの、二棟の真中辺に当たって
いましたね。次の日、そこに破片を拾いに行ったんです
よ。学校の帰りに。前日、師範学校付属国民学校のこと
もたちが帰るところに、爆弾が落ちたんですね。警防団
の人が菜箸ほどの竹の棒で、はらわたをいじっているの
を見たんです。そばには、血がついた子供用の防空頭巾
が落ちていた。そのとき初めて戦争に疑問を持った。そ
れまでは何とも思わなかった。戦争は多分に面白かった。
空襲だって、曇っていない日の空襲なら。それがどうし
て人間がこんなことをしなければならぬのかという疑
問を持った。疑問は持ったけど、やっぱり空襲はされる
訳で、そしたら、こちらには逃げなければならぬ、疑問
を抱えたままで、ずるずると行ききましたけどね。

《敗戦》

藤井 八月一〇日の深夜に発生し八里ぐらい離れた三財村
というところへ疎開してここで敗戦を迎えます。近所の
子供たちが分教場でいわゆる「玉音放送」を聴いたらし
く、走って帰って来て言ったんですよ。「もう戦争は負け
た」と。大人が「そんな事言うとお捕まるぞ」とたしなめ
たんです。そうしたら「そうじゃない」、「いま天皇陛下
がラジオに出やった」、「天皇陛下が『もう戦争はやめる』
と、言いやった」というんですよ。どうも本当らしい。「あ

これで俺は空襲で逃げ回ることはないな」とホッとし
たんですよ。ただしそれは口に出せませんでした。

僕は軍隊へ行くつもりだった。その日一五日の夜、宮
崎にちよつと荷物を取りに帰ったところで、近所に住む、
旧制三高から京大を出て県庁の役人になり、後宮崎県の
出納長になったIさんが僕に「これからどうする」とつ
て言うんです。どうするたって分らないよね。国民学校で
は「航空機乗員養成所へ行け」と言われる。これは六
年生から志願できる、通信省がやってきました。それから
中学一年で陸軍幼年学校の受験資格があり、二年になる
と予科練とか陸軍の少年飛行兵、四年で海軍兵学校や陸
軍士官学校。これしか頭になかったから。「どうする」と
て言われても分かんない。その時「科学者になりなさい」
「日本は原子爆弾で敗けたんだ」と教えられました。

《当時の原爆の認識》

藤井 僕も「新型爆弾」が原子爆弾ではないかということ
は、薄々知っていたんです。子供の新聞（小国民新聞一
大毎発行）にも載っていました（マッチ箱一つぐらいの
爆弾が戦艦を吹っ飛ばす）。ただ広島の話は、中学の教頭
を介して間接的に聞いていたんです。教頭は汽車の中で
その時に広島に居たという陸軍将校から聞いたと、「敵機
が三機来た、三機しか来ないから大したことはない」とみ

んな見ていたら、パラシユートをつけた何かを落とした、『あれ何だ?』と見ていたら、パッと光ってね、その瞬間見ていた人みんなの全身が焼け爛れた」と言うんです。「やられなかったのは防空壕に入って、布団をかぶっていた連中だけだ、だからお前ら、これからは敵機一機でも防空壕に入れ」と教頭は言ったんですね。それから晴れた日でも空襲が怖かったですね。

《戦後》

戦後はね、すぐ台風。物凄いのが来て、その後でまた九月に枕崎台風、九州は二つの台風でやられたんです。家が倒される。枕崎台風は稲の開花期に来たから、米が不作になっちゃった。九州と中国地方ですね。戦後の食糧難の一因です。僕らの校舎は空襲で全焼、校舎代わりになっていた寄宿舎は枕崎台風で倒壊し、一〇月から二里半ほど北にあった落下傘部隊の兵舎で授業を受けました。その頃になると新聞その他で「ストライキ」という言葉が、中学生の中にも入ってきた。僕らは同盟休校という意味で知っていた。それから「労働組合を作らなけりゃいかん」というのをラジオでやったんですよ。その労働組合というのが何だか判らなかつた。

《男女交際の自由》

藤井 年が明けて、校長が朝礼で新聞紙を広げて「勅語」

を「奉読」した。何だか判らなかつたが、朕は神様ではないということらしい。以後勅語奉読はなくなりました。それから占領軍の中尉が学校へやってきて、教師たちの頭越しに、「映画鑑賞」と「男女交際の自由を与えた。この時は教師たちは苦りきっていましたね。彼らの頭の中は、まだそれまでとほとんど変っていません。以後、僕らは表向きは自由になったんだけど。」

《共産党出現》

藤井 それから共産党が出てきましたね。共産主義というのは判らない、子供向けのヒトラーの本でアカと書いてあったのを覚えていましたが。最初は中学の教師に教えられた通り、とんでもない間違いと思っていたけど、親父の話なんかを聞いていると、だんだん共産党の言っていることは正しいんじゃないかと思うようになった。中学二年の夏頃には「アカハタ」を街で売っているんですね。面白い、「天皇ヒロヒト」なんて書いてあって。さらに一年たって、あの二・一スト。学校の先生もやる。生徒を集めて、国語の先生の一人が、かくかくしかじかの理由で我々はストライキをやると思うんですが、こっちは分かんない。早くやつてくれと思っただけ。面白いから。ところが前の晩になって、土壇場で辞めちゃう。本当に残念だった。やつてくれたら学校が休みになるんだもん。

中止を指令する放送も聴きました。それが伊井弥四郎だったというのは後で知った。

《先ず横須賀へ》

二・一ストの五ヶ月後、四七年七月、こっちへ戻って来ました。宮崎には五年と一日いたことになりす。当初は横須賀市の追浜に住んで、学校は鎌倉学園というところに入った。五年前鶴沼に居たときは、中学へ行くなら湘南中学（現湘南高校）だからこの時、先ず湘南中に当たってみれば良かったんだけど。あそこへ行っていたら藤沢小学校の同級生と一緒だったしね。ずいぶん人生が変わったんじゃないかな。石原慎太郎と同級になったかもしれない。まあ付き合うことはなかっただろうけど。鎌倉学園というのは私立で、入ってから分かったんだけど、当時神奈川県では逗子開成と共に悪い方から一番か二番目だという人がいて、まあひどい所だったんですけど、学制が変わり、新制高校になって一年の時、慶応から来た若い先生が、日本の経済発達史を一年間教えてくれた。後で分ったんだけど、それは野呂栄太郎の『日本資本主義発達史』を下敷きにしていたらしい。最後の方で独占・帝国主義と進み、戦争になるというあたりが良く分った。戦争を経験していたからでしょうね。社会主義の話もしてくれましたけど、こっちは分んなかったですね。

《東京へ》

藤井

その頃は社会党内閣だったんですけど、西尾末広の汚職で総辞職、その後の芦田内閣も総辞職して吉田内閣（第二次）になった。そして四九年一月に総選挙。この時、共産党が三五名当選、神奈川県でも三選挙区全員当選でした。

その年四月に東京へ転居した。目黒区に向原町（現目黒本町）月光原小学校と向原小学校の中間です。僕は鎌倉学園にはなじめないまま、武蔵小山駅前の都立八高（現小山台高）に転校したんです。中間部は転入を締め切った後で、夜間部に入ったんです。このとき二年に入ったから、結局高校は四年かかった、夜は一年長いんですね。そこに八高細胞（生徒が作ってる感じだった）というのがあって、ビラが撒かれたり、黒板に何か書いてあったりする。校長がかんかん怒るんですよ。「俺に何の話もない」「届出よ」。僕はおかしいと思った。いちいちそんなことの許可を取る必要があるのか。ある日休校になった時、自習していたら、そこへ腰にタオルをぶら下げた若い先生が来て、話してくれたんですよ。「良い友達を持って」「本を読みなさい」「視野を広くしろ」と、そういうことを時間いっぱい話してくれた。二学期になるとその先生が居なくなりました。校長から「穴先生は体が悪い

ので辞めました」と話があったんだけど、実は共産党員だったらしい。教育のレッドパージは一年早いんですね、一九四九年ですよ。

《就職》

藤井

夜間に入って、昼間しばらくはラジオ作りなんかしていたけど、家も経済的に厳しくなってきたので、その頃、親父の仕事がだんだん傾いてきたんで、僕は武蔵小山駅の近くの工場で働くことにしたんです。一〇人位のところ。電球のソケットなんか作る、ベークライトの成型と、それに金具をつけて仕上げる。そこに一ヶ月半ぐらい居たかな。給料は三千円、まじめであまりしゃべらないのがオヤジに好まれた？らしい。オヤジは朝鮮人で、僕はそこで始めて朝鮮漬けを食べ、味を覚えた。自分のところで漬けていた。だけど日曜日が休めない、休日は一日と一五日だけ。学校で教わった、自由だとか労働基準法なんかが通用しないところがある、というのがそこで分ったんですね。

そんな時、従兄弟が「工大の先生が助手を求めている」という話を持ってきた。鯊釣りに行ったとき隣になったのが工大の金属工学の先生で、頼まれたと。日曜も休めないのはいやだったんで応じることにした。履歴書と身分証明書を出せと言われた。身分証明書は区役所が出す

やつと言われたので、焼野原の中にあつた目黒区役所に行った。本籍を聞かれ、蒲田と答えたら「蒲田の区役所に行け」と言う。そこで蒲田に行つて、初めて一〇年前まで自分が育つたところが、どんな風に空襲で焼かれたか見ることができたんです。何にもない、矢口小学校だけが残つてる。四九年はまだそんな状況でしたね。

それで身分証明書を見たら、「禁治産者の宣告を受けたることなし」「準禁治産者の宣告を……」「その他「前科の有無は何々により証明できない」と書いてあつた。何だこれ、一六才の子供に、禁治産者？。それを工大に出すんです。勤めるため、公務員ですからね。驚きです。

工大では、「工務員」という身分だった。給料は「二級一号捧」、手取り二八八〇円でした。

ここは実は大変なところでした。教授はすぐ怒るんですよ。機嫌にムラがあり、仕事について何日もしない時、落ち度がないのに怒られて、筆頭助手が言うんですよ。「今までは、あなたより年上のしつかりした人が、あなたの仕事をやってただけで、みんな半年から長くて一年半で辞めていっちゃうんですよ。先生がああ調子ですよ。辛いことが多々あると思うんですが、辛抱して頑張ってください」。工大で働いている人は、僕らの高校ではたくさんいて、同級生もいたけど、みんな土曜は半ドン

なんですね。こっちは夕方まで。分ったのは労働基準法とか何とか言っているけど、教授の部屋までは及ばない。そんな所がまだあるということ。

前に戻って、手ぬぐいを腰にぶら下げた先生が辞めたこと、その後高校のラジオ班の中で話題になったんです。小山台高校では部と言わずに班という。この時担当教師が、「藤井は工大にいるじゃあねえか、すぐ分るはずだ」と言うんですよ。その意味が僕には分らない。「工大の労組は左である、そこにいるんだから分るはず」と言うことだったらしい。工大職組は、レッドパージに対し良く闘ったらしい。

仕事は給仕のようなことから実験の手伝いなど、教授から助手の給料を事務所で受け取って、それぞれに手渡すこともやった。自分の給料が安い、もう少し欲しい。教授が三万円かその半分だったか？当時は月二回の支給だったんで。自分との格差について考えていくうちに、最低でも生活できる賃金ならいいんじゃないか、そんな考えに到達しました。

毎日怒られて、涙を流したこともあります。高校で大正生まれの同級生に「お前この二三日影が薄いぞ」と言われました。卒論の学生、研究生、助手にしたってビクビクしているような状態でした。ラジオ班の仲間に話を

し、先生にもこぼして、とにかく毎日出勤するのが苦痛だった。家では話さなかった。親父は勤める前に「事実上給仕みたいなことをやるんだから大変だ、止めた方がよい」と言っていたんで。五年生のときにイジメに耐えた力で何とかやっていたけど、辛くて、疲れて、高校の方をよくサボっていました。なぜか毎週木曜日が一番疲れるんです。水曜と土曜は「特別教科」＝ラジオ班の日で、ラジオ作りに楽しみを見出していました。

朝鮮戦争開始が伝えられたのは日曜日で、「臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュース…」というラジオアナウンサーの声を聴いて、五年前の感覚にすぐ戻ったものです。

《目黒電波へ》

藤井

ラジオ班で親しくしていた一年上のYさんが働いていた零細企業（目黒川左岸、雅叙園の近く）が事実上潰れちゃって、そのYさんの上司のFさんが目黒電波に知り合いがいて、Yさん連れて目黒電波に入った。そのとき目黒電波は国鉄から仕事を請けていたんでね。青函連絡用の無線機に関係していた測定器。当時としては桁違いの値段だったんですよ。三十万円ぐらいだったか？ 人手が足りなくなつてYさんが僕を誘ってくれたんですよ。入社は五一年一月二二日。「宮仕え」から解放

され、毎日ホッとした気持ちで好きな仕事ができて、嬉しかったですね。

五年生の時のイジメと「宮仕え」を体験し、僕の場合は、こんなことは絶対やらないという考え方になって行った。人によっては、例えば上級生からリンチされた人が、上級生になった時、俺もやられたからと下級生をいじめめる人もいるんだけど、僕はその反対の方へ行った。「己の欲せざるところ人に施すことなかれ」ですね。それと目立ちたがらないということが染着いていたんで、僕は組合活動家としては向かないですよ。

三つの所で働いて感じたのは、男女交際自由、男女同権だとかいろいろ言っていたけど、実際は人の行動や考え方は、戦前・戦中と大して変わっていない。戦後民主主義って言うのは、まだ一人ひとりの身についていない。目黒電波でも多分にそうでした。「女のくせに」とか、「お前らまだ学校へ行っている、半人前だ」と。

給料は「本給」手取りで三千九百円になった。残業すれば当時は四割増しでした。給料はその時の社長の思召しで決まっちゃうんですよ。こいつにはいくら、あいつにはいくらと。そこで何年も働いた人が辞め逐次に、退職金を出さないこともあって、ブツブツ不満が燻っていた。FさんはじめYさん、さらに僕を呼んでくれた技

術部長は、目黒電波には一九五〇年に入った余所者で、戦争中は目黒にあった七欧無線（商品名ナナオララジオ）にいた。この七欧無線は、戦時中新潟県加茂に工場を作り、戦後そこは東芝もあり、組合活動が活発だったようです。その技術部長が「組合を作らなきゃだめですよ」と言っていた。進歩的な人ではないんですけどね。

一その当時の目黒電波には何人位いたんですか？

藤井 百人位だったかな。その頃は女の子・女工もいた。会社の所在地はその後と同じで、工場と社長の自宅がありました。両方とも木造。僕らの技術部は工員が寝泊りしていた寮だったところ。寮に居た人たちは社長の家に入れて。僕らが最後に立てこもった所・別館は旋盤工場でした。

《従業員組合の結成》

七欧無線に居た人たち一技術部長系の人たちは「労働組合を作らなければだめだ」長年いた人は「組合なんか作ったら寮に居られなくなっちゃう」と、なかなかうまく行かなかった。

入社して一年以上昇給がなかったんですが、組合ができるちよつと前、五二年三月にまだできていない「組合」の要求で賃上げをした。三割上げたんだけど、二割はそれまでの「生産奨励金」を固定化して、もう一割は労働

時間延長と引き換えという事で、八時始まりで四時半
終わりだったのを四時四十五分終わりにするというもの
なんです。その後で組合ができるんですよ。元七欧の加
茂で職場委員をやったという人が、委員長に選ばれたん
です。奈良原佑二という人です。目黒電波に前から居た
人が副委員長や書記長になった。労政事務所に相談に行
って、労働協約の雛形みたいなものを見せてもらったり
して指導を受けた。みんなに説明会のようなものも開い
たんですよ。労政事務所の人が八人ぐらい来たかな。映
写機持って。二一世紀になって分かったんだけど、占領
軍が作らせた映画で、労組がある職場で賃上げ要求した
ら、「山の上のもう一つの工場ではみんな低い賃金で働い
ている」と社長に言われ、組合は山の方へ行って組合を
組織して、もう一回要求して賃上げを勝ち取る。そして
社長と組合長が握手するという内容だった。映画の多く
の場面で「町から村から工場から」のメロディーが流れ
ていた。映画の後、一〇人位ずつに分かれて話し合いす
るんです。僕らのとこで、ある一人が、オープンシヨッ
プとユニオンシヨップとクロウズドシヨップについて質
問をする。僕なんかは何にも知らないで、労政事務所の
人が説明してくれた。そしてこの組合はユニオンシヨッ
プだと。

日を改めて、会社から時間をもらい、結成大会を開き
ました。規約を審議して決め、事前に会社と交渉してい
た労働協約案も審議したんだけど、生理休暇が一日とな
っていたら、一人の女性が「どうしても二日ないと困る
んです」と言った。男には分からないからね。鶴の一声
で二日に決まっちゃった。別にその人は活動家でもなん
でもない人でした。

労働協約の契約期間は一年間で、延長したければ事前
に申入れることになっていたんだけど、会社側からは申
入れがなかった。組合役員は期限切れ半年後近く九月頃
だったか、「何かあるぞ」と言っていました。

またその時の組合規約は、親睦会の延長線上にできた
こともあり、組合らしいものがあまり無い。たとえば執
行委員会とか、スト権とか。役員は委員長に二人の副委
員長、書記長と二人の会計だった。組合員に慶弔が起き
た時には「これだけの見舞金や祝い金を出す」とかが入
っている。大会に次ぐ決議機関は、委員会だとは決めて
あった。名称は目黒電波測器株式会社従業員組合、親睦
会の性格が残ったものだったですね。

一 結成してそれからどう進んだか、当時の状況などは？

藤井 ちよっと補足を、僕は一九五二年三月に小山台高校
の定時制を卒業し、その二ヶ月後、五月か六月に組合が

できました。メーデー事件は組合結成直前でした。前年、僕が入社する前の一月五日新年顔合わせの日、社長が賃上げを発表してから組合ができる前の五二年三月まで、一年以上賃上げがなかったことになりました。しかもこの間、賃金が全額一度に払われたことがない。「今日は本給だけ」「今日は残りの三分の一」という具合で、技術部長は「この会社は給料を無限級数の考えで払うつもりかな」と笑っていました。しかし別の職場ではその部長がどうしても困る人は申し出れば残り全額を払う」と言った後、一言多かったため部長と殴り合いになったこともあるんです。それやこれやが組合作りを少しずつ進めて行ったという訳です。僕は「その他大勢」の方。

それから組合作りは専門家のオルグによるものではないということ。みんな素人で二〇代後半の人たちがやっていた。「若葉会」という親睦会があったのを「発展」させたんです。役員は半年で改選、結成一年後、メーデー事件の翌年ですね、金が余っているというので、社長も含めみんなでバスを仕立てて、相模湖に行った。丁度五月一日で、途中警察の検問がありました。

一給料が遅れたのは、戦後の景気が悪い時期ですか。朝鮮戦争の「特需」が終わった後の不況？

藤井 景気は悪くなかった、仕事はいっぱいあったし…、

金繰りがね悪かったらしい。それで僕自身は組合結成一年後の五三年四月に、法政の短期大学部に入りました。工科です、といっても電気だけです。夜学です。目黒電波に入って先輩の技術屋がやっているのを見て、僕なりに本を読んで、たとえば (sinhθ) なんて書いてあるのかわからない。先輩がある日「双曲線関数解説」という本を読んでいて、教えてもらおうと、その本に (sinhθ) が出てた。勉強しなければいけないとわかったんですね。数学と電気の「交流理論」を最低限やれば良い、そういう浅薄な考えで、入試に英語がない学校を選んだんです。でも大学だから、いやおうなしに一般教養で経済学なんかやらなきゃいけない。その経済学は、大内兵衛の『経済学』(岩波全書)が教科書で、搾取、剰余価値、社会主義なんかがわかったんです。それまでは理屈は知らないが、社会主義のほうが良いと思っただんですけど、以後は確信みたいになった。

《整理解雇》

この五三年に会社はピックアップの生産を分離し、官庁やNHK、日電、日立など、大手の所からの注文生産に重点を移しました。そして一二月、協約が切れるのを待って、二三名の整理解雇をしました。会社が協約を延長しない、「何かある」と思っていたのがこれだった。

一朝鮮戦争後の不況かな？

藤井

そうですね、仕事はあったんですけど金繰りが悪かった。その時の組合役員は「会社に無理なことは言えない」と言って、整理対象者でない人たちも騒いでいるのに、闘わないんですよ。会社は組合員の騒ぎを感じたのか、「賤別」を一ヶ月分上乘せし、来年三月には払うと言つて手形を出しました。馬鹿馬鹿しいと、指名された人以外に辞める人がかなり居て、僕も辞めました。それから失業保険をもらい、さらにアルバイトをしたんです。

失業保険は五反田の職安、当時はバラックで土間、砂が敷いてあったと記憶しています。週一回行つて認定を受け、七日分の保険金を現金でもらいました。急に若い失業者がいっぱい来ていたこともあって、どこかで大量首切かなと思つたものです。紹介された所に行かないと給付を止められる。東芝の臨時工を紹介され、小向工場で「入社試験」を受けさせられた。落としてもらうように、面接では僕の希望給料を譲らなかつたら、それですぐ面接は打ち切り。採用通知は来ず安心しました。こんなことで、少しづつですが社会経験を積んだんですね。

《傍観者は共犯？》

短大では、一年の終わりに僕を特待生にしてくれた。それでどうせただなんだと、二年に進む気が固まりました。

た。「先生にでも」なるうかと思つて、「青年心理学」をやつたんですが、乾孝先生の講義を聴き、その時期に出た著書『青春の心理』を読んで、戦前の学生たちが、軍国主義に進む当時の時勢に、せいぜい日記にあれこれ書くだけだったことが、時勢を助長したということを知り、また『俺に関係ないこと』として傍観することが、敵に手を貸すことだと教えられました。先生になるには憲法をやらなきゃならない、それは法政大の通信教育部で学んだんですけど、今考えると、当時は憲法が権力を縛る法律だ、と言うことがはつきりしなかつたと思います。短大でやった経済や児童心理学のほかに、当時の「朝日」夕刊で始まつた、女性の投稿欄の「ひととき」が大変勉強になりました。

《工学部（昼間）に編入 - 経済的に逼迫》

短大卒業を前にして、数学もその他の理論も不十分だ、もつと、と思うようになり、工学部に編入することになりました。そこから大変経済的に苦しくなつたんですね。短大でただになつた授業料三期分の「蓄え」も、お袋に渡してしまつて。短大から行つたから一般教養の単位が足りない、夏休みの補講で社会学や哲学などを受けました。社会学は前半の先生が「唯物史観」をやつてくれて、乾先生の著書『一般心理学』とあわせ、唯物論を少し理

解しました。電気工学科は何もかも必修科目で、単位を取ることに追われ、受けたい課目も受けられず期待外れでした。必修科目のうち、金属工学に関する四科目八単位は、講義に出ないで「優」で単位をとりました、工大で働いたことが活きました、「門前の小僧」です。

卒業の半年ぐらい前、石川達三が「朝日」に「世界は変わった」を書き、またスエズ戦争が起きました。法政の総長だった大内兵衛先生は各学部を回り、四年生を対象にスエズ問題の講演をしました。同じ講演がNHKラジオで放送され、その後「世界」に掲載されています。世界中の世論と、インドほか平和を願う各国の努力で、世界戦争にならず解決したことを、先生はほんとに喜んでいました。

《全金東京航空計器支部に一組合員見習い》

それから就職、短大からの編入生に対しての「差別」もあり、やっと受験できたのが国際電気。受験に行く交通費も借金という状態でした。学科試験は通ったんだけど、なぜか面接でだめ、次に来たのが国際電気と同じ並びで、狛江駅の近くにあった東京航空計器。幸いここには、目黒電波でお世話になったFさんがいた。Yさんを連れて目黒電波に行った人です。いろいろあって五二年に目黒電波をやめていた。もうすべる訳には行かないか

ら、「滑り止め」を掛けてもらった。またFさんのおかげで、入社するまでの四ヶ月ほど、アルバイトで航空計器に通いました。そこで、全金東京航空計器支部が年末一時金闘争をやっていたんです。大きな紙に、闘争宣言と題した文書を書いて張つてある。「…今後起こり得るすべての事態の責任は会社側にあることを通告し、ここに闘争を宣言する」。組合員でないのに胸が躍りましたね。

五七年四月に入社、三ヶ月で本採用、組合員になりました。初任給一万二千円也。ところで僕を目黒電波に入れてくれたYさんは、このころ蒲田の東京計器にいました。蒲田と狛江、戦争中は一つの会社だったんだけど戦後分かれた。蒲田のほうが業績も労働条件もいい。で航空計器の人がだいが引き抜かれていくんですね。会社は神経質になって、蒲田に行くやつには退職金を出さないといったらしい。その退職金は、僕が入った時まだ交渉中でした。とにかく退職金協定を決める大会から、定期大会、要求を決める大会、スト権大会、経過報告会、終結の大会、そのほかみんなで労働歌を歌って氣勢を上げる。労働組合の実際の活動に触れたんです。

翌年の春闘で賃上げは僕の場合九九〇円、全体に少なかった。しかしその分三〇分の時短を取り終業が四時半になった。それからメーデー。

「このメーカーはどこの？」

藤井

神宮外苑でした。みんな欠勤で参加するんです。当日出勤する組合員はいなかった。初めて大勢の集まりを見て、大変力強く感じました。秋に警職法のストを一日やった。その頃目黒電波から誘いが来たんです。我が家は相変わらず苦しかったから、その誘いを受けることにした。少なくとも四千円ぐらい給料が増えるように要求し、それが認められたので。

《目黒電波測器（株）のこと》

「ここで最初に目黒電波に入ったころの目黒電波のことを教えてください。」

藤井

目黒電波は敗戦の一年前、土橋測器研究所と二村電機製作所とが合併してできたと聞いています。社長は二村雪郎、専務が土橋晴夫でした。土橋晴夫氏は、松竹土橋式トーカーの発明者の一人（弟の方）で、三二年の「マダムと女房」は日本のトーカー映画の第一号です。二村氏は横河電機を退社して二村電機を創立し、創立当時は横河の下請けだったと聞いています。目黒電波は戦後はレコードプレーヤーのピックアップと、民間放送の開始に対応したスピーカーヘテロダイスン式收音機の製作、調整、修理に欠かせない測定器・試験発振器一テストオシレータを製作・販売していました。ラジオ商やラジオ

アマチュアがお得意さんです。テストオシレータでは、廉価版の「シグナリスト」と言う商品名の製品が、良く売れていました。当時のアマチュア雑誌「無線と実験」、「電波科学」「ラジオ技術」の裏表紙に毎月広告を出していたんで、僕は入る前から社名は知っていた。従業員は大体一〇〇人位だったですね。五〇年秋ごろ、元七欧無線にいた千葉という人が、部下一人を連れ、工場の一角を借りて国鉄からの注文製品を試作していた。それで目黒電波に入ったかどうかという話になり、千葉氏は技術部長となり、新しく国鉄から受注した機械を作るのに、七欧時代のいわば子分を次々に入社させたんです。

その後、NHKや通研（電気通信研究所）や電気試験所などからも注文が来て、生産の比重が「官需」に移って行った。五二年末頃から五三年はじめ、僕が気がつかないうちにピックアップ部門は分離、テストオシレータ生産も縮小した。その後は官庁、大会社相手の商売になって行く。しかし金繰りが悪くなったのか、資金の回転が遅くなったか、五三年秋に整理解雇が起こるんですね。

一朝鮮特需の頃？

藤井

朝鮮戦争は五三年八月に休戦協定だったかな。首切った後、すぐに会社の景気は良くなったようですよ。五四・五年には大きいところから注文が来ていた。保安隊

(現自衛隊)からの注文も来ていたけど、あそこは検査がうるさいんであんまり喜ばれない。ところが保安隊の注文を上回って、他からもどんどん注文が来て、保安隊、その後の自衛隊には、見向きもしなくなった。社長は銀行回りが仕事だったのに、仕事がなくなつたと言うんです。それでも五〇年代は労働者の出入りが激しく、二〜三年でもう半分ぐらいが入れ替わっている感じでした。

一 当時はどこでもそうだったみたいだね。

藤井 僕が戻った五九年には、辞めた五三年と比べて、大体半分ぐらいが入れ替わっていた感じで、それに増えた新しい人たちが加わっていましたね。新卒を多く採るようになってきました。中卒、高卒、それに大卒も。人の出入りはかなり落ち着いてきたようで、労働協約も五八年に結ばれたもので、五二年の最初の比べて、祝日は全部休みになるなど少し良くなっていました。人数は一五〇〜一七〇人位だったようです。また五四年頃だったか、当時の営業部長ほか何人かが退社して、いま綱島にあるリーダー電子が発足し、テストオシレータなどの生産を引き継ぎました。

一 五九年からはどんな状態？

藤井 それまでのお客さん、特に民間の、東芝、日立、日電、松下などからの注文生産で潤っていました。人数は

六〇年代後期から八二年頃には二三〇人位になっていた。
一 生産機種は？

藤井 ラジオや無線通信機の生産測定に使う信号発生器、それにH i F i音響機器の生産に使う測定器、無線機器に使う部品生産に必要なQメータなどです。五六年前後に、同業者の桑野電気、日本無線(測定器部門)その他数社を一緒にして、大きな測定器生産会社しようという動きがあつて、七欧から来た技術部長が乗ったんですよ。

しかし二村社長は、独立したピックアップ部門がパイオニアにノウハウをつかまれた後、捨てられたのを見ていたんで乗らなかつた。それやこれやで、技術部長は辞めちゃつた。さらに僕が再入社する直前、土橋専務が心臓発作で亡くなつた。これで二村独裁体制が出来上がったいたんです。

一 二村さんでどんな人ですか？

藤井 「悪い人じゃない、良いも悪いも中小企業の親父。僕が帰った時、「今は君が前に居たときより仕事しがし易くなっている。これ以上望まれてもすぐにはできないがだんだん……」と言っていた。また(賃金について)「君たちは若いうちに会社に貸しを作っているんだ、俺は借りているんだ、そうしておけば必ず将来報われる」とも言

っていました。機嫌のむらが多い人で、何かで急に怒り出す、そのため回りは腫れ物に触るように気を使っていたんです。言葉返す人は皆無でした。六四年、春闘の後、田村東洋彦さんが訪ねて、「日中国交回復促進署名の目黒での呼びかけ人の一人になって欲しい」との申し入れに「日中国交回復は国民の常識だ」といつて快諾したと言うことです。「先ず目黒一の賃金を目指す、それから東京一、日本一に」とも言っていた。

《全金の賃金委員会に出る》

五八年、当時の目黒電波技術課長に誘われて、すぐ目黒電波に行った訳ではありません。僕と仲良くしていた、都立大の物理を出た入社同期生が、この秋から航空計器支部の青婦人部長に選ばれていた（立候補したわけではない）。その人の要請で、警職法反対のデモに青婦人部員として参加しました。また、年末にはやはり青婦人部員として、全金の賃金委員会に調査部長と一緒に出ました。五九年春闘の準備だったんでしょう。渋谷・桜ヶ丘の全金本部の二階でやりました。慶応の黒川先生（当時はまだ講師）の講義だった。僕には、目を開かせられるような内容でなかなかのものでした。

年が明け、一月一日付で目黒電波に再入社したんです。僕が楽しみにしていたのは、部長のUさんと一緒に仕事

ができるということだったんですが、その人は三年ほど結核で休んでいて、僕が再入社した一月に出社予定でした。

ところが、会社は就業規則を理由に、問答無用でUさんを首にしてしまいました。当てが外れた僕は、航空計器に戻ることもできず一人悩みました。一方賃金委員会には出たいと思い、航空計器支部の青婦人部長に「俺もう辞めちゃったんだけど出さしてくれ」って、二回位出させてもらいました。講師は黒川さんから堀江正規氏に変わって、明工社が出てたんですよ、その明工が言ったんです。「うちの中卒の女の子たちが（月給）四～五千円もらってて、もうこれで良いって言うんだけど…」堀江さんが「シチズン田無の賃金はどうか」と言ったら、シチズン田無から七千円を超える額が出て、さらにセイコーもそうだったんですよ。僕が驚いた。

《目黒電波では》

目黒電波の方の組合は、僕は試採用なしに本採用だったんで、すぐ組合員になった。その時、組合からもらった協約書の冊子を見て、僕が居なかった五年ほどの間に労働条件が少し良くなっているのを感じました。前居た時は、「三大節」（新年、天長節、明治節）しか休めなかったけど、それが全部休みになったなど。組合

ができて、少しずつただけど、実りがあつたように思うんです。社長もそんなに悪い人じゃなかったし、「いまは前より働きやすくなっている」と言っていました。

それからこの間に、組合は機関紙を出していた。「あゆみ」という標題は、みんなから募集して決めたようです。後で分ったことですが、東海の原子力研究所の組合も「あゆみ」という機関紙を出しているようで、他にも「あゆみ」は多くあるようですよ。

Uさんのことでは当てが外れたけど、短気を起こさず辛抱して働いてるうち、仕事は面白かったから、三月末、新卒の大卒、高卒二十名以上が入ってきた。僕がいた技術部で大卒四名、高卒二名だったかな。そういう連中と仲良くなった。その連中は僕なんかより行動的で、職場の因習には批判もするし、従わない。

組合の定期大会は、結成時と同様で春と秋の二回、その秋の定期大会で、会計報告に会社からの寄付金というのが入ってた。それに僕は、異議を出したんですね。ソフトボール大会を開いたときの寄付金だ、と言う答えだった。だったらソフトボール大会の収支として別に出せと言ったんですが、これで僕は皆さんににらまれちゃった。「あいつは生意気だ」と。

《投票の「暴力」で委員長に》

一入ってまだ二年もたっていない？

藤井 そう、人は五年前と大分入れ替わっていました。出入りはかなり収まっていますけど。翌六〇年二月に役員選挙をやるんですが、その前に規約をちよっと改正したんですね。僕が提案したのではなく、当時の役員（委員長と二人の副委員長）が提案したものです。役員任期を一年にする、選出にはそれまでは、先ず職場ごとの予備選挙で候補者を職場の数だけ出し、その中から選ぶというのを、いきなり組合全体の中から選ぶという方法にした。前年の定期大会で発言してしまつたことで、「生意気なやつだからやらしちゃえ」と、決選投票の末、僕が委員長にされちゃった。立候補する人もいないし、そんな制度もない、活動家という人もいない中での選挙です。ある役員は大会で、「組合役員をやるんだつたら死んだ方がましだ」と言つたと聞いています。役員任せ、無関心、確かに大変です。

それからもう一つ、僕がいなかった時期、その時の委員長が協約を結んだ後退任し、次の委員長が選ばれた時、会社は、その新委員長を含む何人かを、課長補佐に昇格させて組合から抜いたんですね。その時にはだいぶ騒ぎになったらしい、組合員が怒つてね、でも押し通されたと言っています。

委員長にされて本当に困った。前に言ったようにそんな柄じゃないし、何していいかわからない。

一 執行委員会があつたんでしょ？

藤井 ないんです。結成した時より後退している。委員がいますけどね。副委員長の一人が機関紙を出す、もう一人が会計をやる、そんな状態です。定期大会で「施政方針」を述べなければならぬ、もう覚えていないけど「成績査定をなくす」「誰もが低賃金だ、あの人より多くではなく全体を上げる」などと言ったと思います。全金で身に着けた「理論」です。これが機関紙に出て、会社が僕を呼び出していちやもんをつけた。半年ぐらい前にも干渉があつたらしく、そのことは機関紙にも出た、僕の場合で二回目です。「会社の言うことには従わない」と言つてはねつめたんですよ。

《一時金に一律を付けさせる》

すぐ夏季一時金になります。全金のやり方だと、当時委員だった天野さんもそういう意見だつたんですが、一律を付けてみよう、底上げをということ、そういう提案をして全員投票で要求を決めて、交渉しました。交渉というほどでもないんですが、とにかく一律を取った。この会社で初めてです。その後ホツとしちゃつてね、七月・八月は委員会も開かず、それを批判して意見書を出

してきた組合員がいましたね。九月には副委員長一人が改選になり、一年前大卒で入ってきて、僕と仲良くなつていた、同じ技術の者が選出されました。柴田といいます。だんだん僕の同調者みたいのが増えたんですね。天野、柴田、意見書を上げてきた若い(僕より)人…。

一 後藤さんは？

藤井 後藤さんはその頃目立たなかつた。

一 どうやって組合を強くして行つたのか、どんな活動をやつたか、そこらへんを。

藤井 六〇年安保闘争はやってないんですが、僕が委員長になつた頃から、安保は盛り上がってましたね。どう間違つたのか「今日の超勤は拒否せよ」なんていう指令の電話が来たことがあります。

一 共産党？ 全金？

藤井 総評系でしょうね。その後社会党の人が四～五人訪ねて来て、「デモに参加して欲しい」と言つて。その中区議会議員の斉藤常八さんが居たんですよ。

一 共産党は？

藤井 来ません。もう一つ、社会党は、僕が委員長になる前から「社会新報」を組合に送ってきていたんです。六〇年五月頃だつたか、「これからは購読料をいただけませんか」と通知が来た。委員会に諮つたんですが「購読す

ることはない」ということになった。それじゃ悪いからね、僕が自腹切って取ったんです。大西さんという若い人が毎月集金に来るんですよ。その際、いろいろ話をすることがあった。「社会党の党員はいま何人ですか？」と訊いたら「五万人」ということでした。そこで共産党はと訊くと、共産党も五万人と言っていました。そのほか社青同というのがある。「学習会をやるんだったら講師を世話します」これは僕が訊いたことに対してですが。

《闘争積立金制度を作る》

一労働組合強化のためにどうしたのかを話してください。

藤井

組合では、副委員長改選後賃上げです。当時は秋に定期昇給をやったんで。この時の賃金要求を考える時、その頃東京計器に行っていたYさんから、全金東京計器支部が作った冊子をもらってきた。これがその後大変参考になりました。東京計器支部はすごいと思いました。秋の定期大会は賃金要求だけでなく、闘争積立金制度も作ろうとした。航空計器でやってたんです。だけど本給の何パーセントという風にはできない。まだ賃金は一人ひとり秘密にしているような状態だったから。だから月一〇〇円という提案を、大会に出したんです。その定期大会を知らせるポスター、張り紙に日時とともに議題、その一つに「闘争積立金について」と書いた。そうした

らすぐ会社から反応があった。部長が僕のところに電話してきて、「闘争積立金と書いてあるのは？」と言う。それはストライキをやる時の資金をあらかじめ積み立てて置くんと言ったら、「そういうことを書かないで、ただ定期大会だけで良いじゃないか」と言うんで、それはこっちの自由、あれこれ言うんなら出るところへ出て争うと言うと、引っ込んじゃいました。

大会では若い人の発言がかなりあり、一〇〇円では少ない、多い、という意見が出てね、結局一〇〇円に決まり、賃上げ要求額も決めました。それを、翌日文書にして出しました。要求理由についても「格調高い」一文を認めて、付けたんです。僕が委員長になって、会社との間で、要求ほか話し合いで決ったことなどを、書面でやることにしたんです。

一書面で作るといのは航空計器が参考になった？

藤井

そうですね。それまでは口約束だったですね。書面でやるというのは大方の要求でもあったようです。それで要求を出したら、その日だったか翌日だったか、「社長室に来い」と副委員長二人と三人で社長室に行ったら、社長も賃上げを考えていたと、というのは求人を出しても来ないんですよ。他社の初任給を見ると、目黒電波よりちよつといい。だからそれなりに目黒電波も上げると

言うことだった様です。組合の要求と一致してたらしい、ただし女性に対する差別はあった。

こっちの要求は差別なしだったんだけど。社長は自分の目論見と一致したから、滔々としやべりだしてね、君たちも将来のことを設計できた方がいいだろう、藤井君どうだ」って言うんで、「いや私は毎日毎日の生活で精一杯で、先のことなんか考えてない」と言ったら、急に怒り出したんですよ。「ウソだ」と言うから「ウソと言う証拠がありますか」と返したらますます怒り出して…手を震わせて怒鳴りだした。夕方、あいつは首にしると言うことになったんだけど、部課長の間で支持されなかった。次の日（日曜日）僕を引っ張ってくれた課長がうちに来て「社長に謝ってくれ」と言うんで、僕は謝らないと言ったんです。「社長に謝って、課長補佐になって組合から抜けたら」とも言いました。

一社長の意向で来た？

藤井

そうではなく、間に立つ部長と相談してのことらしい。組合では委員会に報告したら、委員が怒り出したんですね。超穏健派と思われる人までね。そんな空気が会社に漏れて、首は表に出ず、引っ込められました。以後、僕はそれまで社長に目をかけられていたんだけど、逆になっちゃったんです。社長の嫌われ者に。賃上げは、女性への差

別五百円はどうにもならなかったけど、後は要求通りで終わりました。

次に年末一時金なんですけど、今度は一律が通らなかつたんです。僕自身も、やっている途中で風邪で寝込んで、金額は非常にいいんですよ。どうしようもなく、妥結のための大会を開いたんです。ここで若い人たちがいろいろ発言した。妥結大会を開くのは僕が委員長になってはじめてなんです。経過を詳しく報告して、終結を提案する、夏の一時金では意見なしでした。大会後五十過ぎの人が、僕にご苦労さんと言って、会場を出て行った。まあ組合内では藤井は支持するが、会社への不満がいつぱいたまっている、という状態が大会の空気でもわかるんですね。

下からの意見を聴き、要求や方針を決める。口頭でなく要求や大事なことは書面で残す。定期大会だけでなく、妥結などは臨時大会を開いて決める。こんなことで一年間やりました。その裏で僕自身は迷い悩み、逃げ出したいと思って、六〇年夏IBMが募集していた時には書類を送ったりしていたんです。当時IBMは、毎月の賃金だけでなく一時金が桁違いによかった。

《天野委員長に代わる》

藤井

年が明けて六一年、僕がいた技術部で、仕事に関し

て。ペー一社員全員で会社に意見書を出し、課長と話し合いました。これがその後の勢いをつけたようです。そうこうしてるうちに、僕の任期が来て役員選挙になりました。天野さんと僕が決選投票になりました。僕は解放されたいから天野支持。二、三票の差で天野さんが当選。僕はもう万々歳だった。

それで引継ぎになる。僕が委員長になった時、組合にあった「労働便覧」で労組法を読んだんですが、組合法上の組合は、会計報告に職業的資格のある監査人の監査報告をつけなければならぬ、とある。我が組合は組合を結成した時、一回だけそれをやった。以後ずっとやっていないのでそれをどうするか、全金航空計器支部はやってきた。それで教えてもらおうと、天野新委員長との引継ぎの際、休みをとって二人で聞きにいったんです。

二月末頃だった。航空計器支部の書記長は専従で、専従協定は僕が在社中に結んでいました。当時の書記長は林さんで僕の一年後に入社した人、在社中に話をしたこともある人でした。公認会計士とその事務所、そのほかいろいろ教わりました。全金に入るのにはすぐではなくても、地区勢には入っていた方が良いでしょうと云ってくれた。加盟費は航空計器の場合一人一〇円でした。またこれが規約規則のバイブルですよ、「どうぞ」と富士重工宇

都宮の「規約規則集」をもらいました。
《全金を訪ね西村氏に教わる》

藤井

狛江から公認会計士のところに行く途中、渋谷まで来たところで、天野さんがね、「こうやって二人で出歩くことはめったにないんだから、全金の本部に寄ってみよう」って言うんです。賃金委員会本部がどこか知っていたから、そこへ行って全金に入るにはどうしたらいいのか、そんなことを聞きに来たって言ったんです。そうしたら若い人が出てきた。それが西村なおきさんでした。

西村さんは、目黒電波が、東亜電波や日本通信機と同じ程度の同業だとすぐにわかったようです。航空計器は国際電機およびジュエーキミシンと並んでいて、「環境」が良いが、目黒電波は周りに組合がなく地理的に良くない、全金に入るのには特別な資格は要らない、規約綱領を認めれば良いのだが、入ろうとすると必ず会社が妨害する、組合の中を固めておかないと入れない。全金に入ってもすぐに労働条件が良くなる訳ではない、しかし全金の行動にほかの支部とともに参加し、五年たつと変ってくる、全金は一人でも入れる個人加盟、などのことを話してくれました。

全金に行つて西村さんと話をした効果として、全金地域支部から春闘準備の討論会の案内葉書が来たんですね。

天野さんがそこに二十歳前後の若い人一天野さんは「青年将校」と言っていました一に行かせたんですよ。行った連中が洗脳されて帰ってきた。「労働力の価値」なんて言ってるね。社青同からも働きかけがあったみたいで、そっちに行った人もいたようです。

《会社が二度目の昇格人事を発令し組合が立ち上がる》

藤井 組合は三月が「新年度」で、定期大会へ向け「今度は運動方針（案）を文書にして出そう」ということで、

僕も最後のお勤めだから、天野新委員長以下副委員長二人と僕との四人で相談している時に、また昇格人事が来たんですよ。三月二〇日頃でした。僕の他数人を課長補佐に、さらに何人かを係長にすると。該当者には委員もいたこれで二度目です。僕は前の事件も聞いているし、辞令を受け取らなかった。みんな騒ぎ出して反対闘争が起こった。自然発生的に。反対闘争が盛り上がり過ぎて、初めてスト権確立に進む。スト権の規定がなかったから大急ぎで規約に付け足したんです。賛成が大多数でスト権が確立する。外では社青同や民青から騒ぎになっているという話が広がって行ったようです。大野が民青に入っていたみたいですよ。

《目黒労協がやって来る》

藤井 先ず地区労を名乗って区役所の船戸さんが来ました。

三月二三日でした。その次に来たのが黒木（全国税）さん、当時労協の調査部長でした。黒木さんがたびたび来るようになって、さらに前田さん、川島さん。それと会社には日大の夜間部に行っていたのが二人居て、もうひとりの若い人と三人が中央合唱団辺りへ行行って、労働歌のテープをもらって来た。この連中が昼休職場を回って、テープを廻し労働歌を教えたんです。これは全く自主的にやったもので、天野さんも僕も命令していない。日大へ行っていた二人は安保闘争の時、学校へ行く途中でデモ隊に出会って一緒にデモをやった、そんなことがあったんですね。

《初めてのメーデー》

メーデーにも参加しようと、会社を休んで一〇人位が地区労の部隊に参加しました。そこで全金東京電波分会の鉢巻をしたり、のぼり旗を持った連中にも出会った。分会というならどこの支部なのかと思いました。一時金闘争に先立って、先ず地区労に入った方がいい。前田さん（事務局次長）と川島さん（専従書記）が来てくれて座談会をやりました。これに若い人が二〇名ぐらい参加した。それからストライキの学習会をやるうとなつて、黒木（地区労常幹・全国税）さんが税務署の会議室をと

ってくれた。我が組合から三〇名以上参加したかな。

黒木さんは、東方電機、全金明工社支部の人たちを呼んでくれた。東方電機は一人でしたかね、明工は西川忠さんが若い女性三、四人を連れて来たんですね。東方電機では、この春闘でストをやり構内をデモ行進していたと、黒木さんとともに話してくれました。遅れて東京電波の西山さん、電波のストについての話がなかなかまとまっていて良かった。「ストをやめるときの大会では泣き出した組合員がいた、やめる時よく話し合って決めなきゃだめですよ」って。我が組合の人たちは、みんな西山さんにほれ込んだじゃってね。黒木さんの呼びかけで政暴法反対のデモにも参加しました。

地区労加盟はよく話し合った後、全員投票で組合員の三分の二を少し超える賛成で決めることができ、六月二六日に、東急大井町支部の事務所で開催した幹事会で承認されました。

一時金闘争は、本給×三・八プラス一万五千円だったかな、団交報告をやると拍手喝采ですごかった。要求大会でも意見がいっぱい出てくる。三・八プラス一万二千円(内六千円は七〜九月二千円ずつ)で勝ったんですよ。ところが支払いを前にして六月三〇日には払えないと言ってきた、三和銀行祐天寺支店の当日の預金残高を多く

したいと言う「銀行の都合」が理由です。支店長の成績のためにわれわれが犠牲にされるのかとみんな怒った。

七月一日は土曜日(当時は休日ではない)だからいいだろうという会社の想定外だったんです。これも自然発生的に騒ぎ出した。そんなこともあり、それから会社の動きがおかしくなった。当時社屋は木造家屋ですから、社長室でなんかやっているらしいのがわかるんですよ。近くの職場にいるのが「近頃なんかおかしいですよ、今日は新聞に広告が出てますよ」というんです。「労務管理募集」というのが「朝日」(資料②)に出ていました。

【資料②】

「朝日新聞」一九六一年七月七日

電話は会社の番号じゃないけど、僕には見当がついて

た。組合側は労働組合らしく規約を作り変えようと、規約の審議をやっていた。西村さんにもらった全金支部のモデル規約より、航空計器でもらった富士重工のほうが判りやすい。全金のは（本部の）規約に準ずるといふ条項があつてね。富士重工のを参考に自分たちの規約を考えていった。その途中で僕に対する首切が出たんです。

《共産党細胞の結成》

藤井

三月四月に地区労の人たちが足繁くやつてきた後、四月末だったか共産党の高岡さんが「赤旗」を小脇に抱えてやつてきたんです。応対した天野さんが先ず捕まつて五月五日頃入党し、ついで僕が二〇日、日大に行つていた二人がその後、八大会前の地区党会議では僕が代議員で出ました。この辺で会社を感じたいんですね。それと八大会に来た外国の代表が、羽田で止められた時、それに抗議する共産党と民青のデモをやったんですよ。その時のデモも一万人位ですごかった。デモと並行して目つきの悪いやつが歩道を何人も歩いているんですよ。そこで写真を撮られたのを、秋まで知らなかった。黨員が八名位になったところで、七月八日（日曜）に結成の会議をやるうとした。その前日仕事が終わつた時、課長が「今日これから開いているか」と言うんで「今日はだめ」と答えたんです。その後予定通り自由が丘の喫茶店に行

つて、天野さんらと明日の打ち合わせなんかやつた。八日の会議は代々木八幡の近くの黨員の部屋でやりました。高岡さんが来てね、「社会新報」を持つてきたのがいて、トップに春日庄次郎離党というのが写真入で大きく出ていた。なお、社会党の方は三月か四月に社青同に入ったのが何人かいました。

三月に電通会館で学習会をやつてね（社青同主催？）、向坂逸郎の「構造改革批判」と言うのに僕も行きました。目黒電波からほかに四人位一緒でした。質問の時間に、「マルクスレーニン主義は一つなのに、日本では社会党と共産党があるのはなぜか」というのが出て、向坂逸郎は答えたんです。「確かにマルクスレーニン主義は一つだし、しかし解釈が二通りある、社会党は日本は独立しているから社会主義革命をやるといつている、共産党は日本は独立していない、だから独立のための革命をやつてから社会主義革命をやるといつている」。その時、僕は共産党の方が正しいと思つたんです。

もう一つ、三月四月昇格反対の騒ぎで、天野さんとも選ばれた副委員長が会社を辞めちゃうんです。いい人だったけど争いを好まない。そこで僕が立候補して副委員長になっていた。またもう一人の副委員長の柴田はメニエル氏病になって、関西に帰ることにして、六月に

は副委員長を辞めて、代わりの人が副委員長になっていました。

《藤井首切》

藤井

細胞結成の前日、土曜日に課長から話があると言うのを断った。そこで七月一〇日月曜日の終業後カトレアという喫茶店、「マッターホーン」の少し先です）で話しを聞きました。「何も言わないで、すぐ辞めてくれ」と言うんです。社長の意思のようでした。「会社をつぶしても藤井を首切る」と言っていると。辞めない、闘うと意思表示して、すぐ、まだ会社に残っていた天野氏に連絡しました。天野氏は、あっちこっち連絡したけど誰もいなかったんです。一人いたのが共産党地区委員会の肥後さん。地区委員長ですね。今の区役所から少し降りた辺りに事務所があった。

丁度その日は引越しの日で、線路の反対側のマンション、あそこへ。荷物を運んでいる途中、その座敷にステコスタイルの肥後さんが座って、その前に天野さんと僕が座って話をした。肥後さんは「目黒電波と、三光は黨員が増えた速度が速かった。これだけ速いと敵にかまれる」といって、あの頃の池田・アイゼンハウアー会談から説き起こして、かくかくしかじかの情勢の下で、お前の首切が出た、「矢はまさしく的を射た」と。目をか

けてくれた社長に、叛旗を翻した肥後さん自身が受けた首切と、似ているとも言っていました。組合のみんなに呼びかけて闘う体制を作る、それができたところで労働委員会へ持って行きなさい。そんな話だったですね。また「君は、動じないで頑として構えていること、周りは見ているんだ顔色を、だから怯んじやいけない」と。地区委員会を出て、共産党はブロック会議の日だったから南税の事務所に行つて話をした。

翌一日、課長は、さらに解雇理由は課長補佐の辞令を受けなかったことだと告げました。その夜、兼永地区労働幹（南税）黒木さん、前田さんらと泡盛屋の二階で話をしたんです。平休助さんの家です。泡盛飲みながら…。明日は会社に撤回の余地を与えるため、組合に発表する前に団交を申し入れ、反対の意思表示をする。と言うことになりました。二日、団交を申し入れたところ、会社は何人かの組合員を呼び出して工作を始めました。その後団交、組合の強い要求でやっと出てきた社長は一方的に課長補佐を断った、言うことを聞かないやつは出て行ってもらいたい、と言って出て行きました。僕はそれに「闘うぞ」と浴びせました。昼休組合全員が集まり、僕がそこで経過報告をしました。直前の昼飯はやっと胃に収めた感じだったのに、報告が終わった時はさっぱり

してました。その時、珍しくひげを剃ってネクタイを締めた前田さんが来て、僕が出るなり、開口一番「鍛えられっぞー」と言いました。報告抗議集会は、臨時大会になりスト権が確立し、気が遠くなるような気持ちになりましたね。

一三日団交申し入れ、会社は明日まで待ってくれと早くも動揺し始めた。僕は昼休、武藤電機という会社が東京電波の近くにあったんですが、そこで一時金闘争が難航しているというので、前田さんに連れられて行ったんです。社前抗議集会で地区労議長の湯田さんが挨拶をしていた。青年部長の磯貝さんも来ていた。僕もそこで挨拶し首切のことも話したんです。さらに夜、また泡盛屋で相談し、この時は高岡さんも来ていたな。一四日夜からストライキに入ることにし、支援の手配を地区労でやることになった。

そして一四日、昼休抗議集会を開き、それを背景に団交を開きました。僕は言いたいことをワーツと言つてね、会社はシュンとなり、社長を呼べという要求に引き下がり、だいぶ経ってから、解雇撤回を告げにきました。三時近くになって、抗議集会は労働歌を歌い続けていましたね。この五日間、僕は外に追い出されることもなく仕事をしていたし、課長は仕事の相談をしたほどです。

一解雇したら大体入構を拒否するもんでしょう。何なんだろう？

藤井 わからない。いい意味で慣れていないと言うこともあるんじゃないかな。

一新聞で募集した労務屋は？

藤井 それは僕の解雇撤回を評議している時に来たと言つていました。飯塚康雄という男です。当時三八歳、倒産したガス器具製造会社で倒産整理をやっていた、その組合の連中が自宅の垣根を乗り越えて押しかけてきたっていうんですけど、組合の名は明かさないんです。

一それと気になるのはそのころ目黒電波と三光が狙われていたのを、地区委員会はつかんでいたんですか？

藤井 三光では、何人かが風呂に会社の風呂でしようね、入っていた時、誰かが話していた、「どうも近頃共産党が会社に入り込んでいるようだ」と。その話を聞いて地区委員会は「しばらくおとなしくしているように」って注意したと言っんです。

一その時まだ丸山さんは区議候補にはなっていなかった？

藤井 まだだったと思う。

一地区労役員には？ 争対部長だったからね。

藤井 役員になっていたかどうかはわからない、地区労の学習会（六二年二月）には石油ストーブを持ってきてい

ましたよ、講義を聴きに。

《目黒学友協議会三日学協のこと》

一目学協の話が誰からも出ていないんですが、その頃はまだできていない？

藤井

われわれの組合では六〇年の末か六一年の初め頃、副委員長の柴田が「学習の友」を買ってきた。当時は普通の書店で売ってたらしい。その「友」に書いてあったんだと思うんだけど、今度「月刊学習」というのが出るんで、それも買ってみようと柴田が言っていた。教宣活動に使ってたんです。柴田は関西の出で、病気で六一年八月に退社して帰りました。「友」は職場には六二年には入っていたと思う。

六三年春闘のとき、僕は「友」に出ていた長崎相銀の闘いや、岐阜の方？の製糸（紡績？）工場での女子労働者の闘いを見て、非常に勇気付けられたんです。それで六四年じゃないかと思うんですが前田さんが「学習の友」をやるって、リュックサックに「友」を入れて目黒中をスクーターで回って広めた。一方で石原さんが、唐が崎労働学校と言うのを、六三年頃にやっていたようです。電柱に張った手書きのポスターを見て、参加した人もいたと聞いています。僕の手元にある六七年六月の目学協第四回総会の議案書では、六三年二月一二日に目黒

公会堂で、柳田謙十郎氏（労働者教育協会会長）を招いて結成学習集会を開いたとあります。六七年には長者が崎にバスを仕立てて海水浴に行った、また七三年夏には西湖へキャンプに行きました。両方に僕も参加しています。

さらに稲田通信の争議があつて、前田さんが延原さんを後継者にすべく、専従の賃金を出すための「賛助会員」を組織して回ったのが六七年頃です。労働学校六期の卒業生は「花の六期生」と言われていて、その後の活動の中心メンバーでした。理化電機の石倉・松本さんなどです。多分、高崎御夫妻も。沢井誠一さんは六九年に目黒電波に入り、組合の働きかけで労働学校に行きました。正代さんもその後学校に行つたらしい。延原さんが非常に熱心な女性がいると言っていた。僕は共産党地区委員会の教育部だったので、六八年頃の新入党员学校で始めて会いました。それから六九年春だったか、目黒公会堂をいっぱいにして、イタリア映画？「明日に生きる」の上映会もやっています。

《全金目黒地域支部ほか》

一個人加盟の労働組合では、組合を作るときの核になる人たちが強い役割を果たすんだけど、目黒電波の場合は直接共産党がその役割を果たしている。核になるのがどこか

組合はぜんぜん違ってくる、そこらへんで気がついたということとは？　あまり気にしないで共産党がやるもんだと思っただけのことですか？

藤井　そうですね。それとも一つ、全金の地域支部を年内に六〇〇人、ゆくゆくは千人にしたいという共産党のグループ会議を、八幡町会でやったんですよ。六一年六月か七月です。われわれの組合は全金じゃないけど出ると言われて…。前田さんも来ました。地区の労対部長としてだったかな。明工の西川忠さんも来てた。この時前田さんは地域支部の役員に注意してました。「組合事務所には『アカハタ』がいっぱい積み上げてある、普通の人が来たらアカの巣窟と思われるぞ」って。

グループ会議はその後も何回かやって、地域支部の定期大会を準備する会議にも僕らは出てたんですね。その会議で高岡さんが「委員長は西山さんやってくれますね」って、言ってたからそれまでの委員長は川瀬さんだったように思いますね。それで公会堂第一会議室で七月三〇日に大会を開きました。規約を審議して、西山さんをはじめとする新しい執行委員を選出しました。議長は東京電波の遠藤さん、共産党から高岡さん、それに民青地区委員長の森下恭子さんが挨拶に来てました。目黒電波から僕や天野さんなど四名位、終わるまで見学・傍聴しま

した。

一 その時の地区労務局長は？

藤井　大松さん（東急運輸）で事務局次長が前田さん。

一 地域支部は六三年が最高なんですよ、四百人まで行っちゃった。

藤井　グループ会議では、明工社支部も地域支部に入るという地区委員会の方針だったですね。それから首切で補足すると、六〇年か五九年に起きた本多通信の首切りでは、前田さんの話で、職場は闘おうとしない、それで会社のお得意が電電公社だったので、全電通の人に団交に加わってもらったら解決したと。

明工では北野さんがやられた時、やってきたオルグが「あんた諦めたほうがいいよ」と言ったというんですね。それから見ると目黒電波のは良かったと言ってます。それに前田さんは、目黒電波の組合はレベルが高いと言ってます。地区労や先輩組合に助けられてようやく動きだした組合なのになんで？と思っただけですが、「組合の三分の一が活動家」だって言うんです。前田さんらが来た時など、大勢座談会に参加していたことを言っただけですね。

一 党細胞は当初八人しかいなかった？後で増えただろうけど？

藤井　僕が首切られたことを聞いて入った人もいて、六一

年末までに一四名になっていったと思う。組合の方は八月に規約を改正して、名称も従業員組合から労働組合に変えた。執行委員会も置くことにしてね。この時だけ「役員選挙委員会」みたいなのを作り、候補者を決めてね、信任投票の形で選出したんです。天野さんが委員長で僕は書記長、副委員長は若い社青同の人。

一名前は？

藤井 小原といいます。新しい体制で九月定期昇給に合わせて賃上げ闘争に入りました。賃上げ五千円、三割の物価手当を本給に繰り入れ、男女同一賃金、家族手当を千円に、途中入社者の賃金差別をなくす、などを要求したんです。団交を重ね、会社は賃上げは四千円、家族手当と男女同一賃金は要求通り、途中入社者の是正は三年間でやる、それに物価手当の本給繰り入れを、退職金算定についての条件付ですが呑みました。それを不服として、一〇月一三日の金曜日にストに入ったんです。意気高く四日間やったけど、賃上げは進展しなかった。途中入社者の是正を二年でやるというところで妥結したんです。川島さんと前田さんに団交に加わってもらいましたが、社青同は豊野（東京地評オルグ）さんと呼んできましたね。ストに入ってから、執行委員会が社青同派とその他で少し意見の違いのようなものが出てきました。大詰め

では大松事務局長に入ってもらいました。会社も大松さんについては知ってたようで、何より貫禄がありましたね。一言三言やりあううちに会社が圧倒されちゃう。とにかく終わったんですが、大会にかける前に、僕が指示して旗を降ろしたりして、そんなことも含めて消極派の人たちが「争うのはいやだ」と反旗を翻し始めた。社青同は、この頃全金加入反対だったんですが、賃上げ闘争後賛成に回った。しかし組合全体では不団結もあり、提起できずに終わったんです。翌年春、西村さんや地域支部の遠藤日出男さんに来てもらい、座談会をやりましたが。

《労務管理・飯塚が動き出す》

藤井 新聞広告で雇い入れた労務屋の飯塚は、賃上げストを乗り切ったあと、若い課長補佐連中を手なづけ、社内報を出し、年末にはダンスパーティーをやるなどしてきました。これまでは文化活動は組合主催か会社共催だったんです。

《六二年春闘と唐ヶ崎共闘結成》

藤井 共産党は八回大会後の地区党会議で、大地区制を採り、目黒は、品川、大田、世田谷とともに南部地区となりました。そして目黒を、立会川、呑川、唐ヶ崎、目黒川などに分けて編成することにしたんです。それで前田

さんと川島さんが、唐ヶ崎共闘を作ろうと、六二年一月末頃、中目黒銀座会館で結成の会合を開いて、講師を呼んで春闘の学習もやったんですね。だから唐ヶ崎共闘は労働組合の共闘組織だった。

そのすぐ後、目黒地区労の春闘学習会を、碑小学校の体育館でやる。体育館が満員になった、先に言ったように、丸山さんは石油ストーブを持ってやってきて、それにあたりながら講義を聴いていました。暖房がなかったですから。三日連続です。講師は一日目が吉村瑛さん、二日目が黒川さん、三日目が堀江さんでした。吉村さんの話が一番分りやすかったですね、皆さんの評判も第一だったようです。

我々は昨年九月に賃上げをやったばかりでしたが、初めての春闘に取り組みました。しかし組合の足並みも、もう一つで、会社も出さない。それでも家族手当を妻に限り五〇〇円上げ、五〇〇円で昼食の「給食」をするなどを取って終わりました。

一賃上げの要求はどれくらい？

藤井 はっきり覚えていないけど、二〜三〇〇〇円だったかな。スト権投票をやるかやらないか、じっくり考える「大会」を開いて、みんなが真剣に考えるようになったところで、結局投票はしなかった。失敗すると後を引く

んで、僕自身は病氣（血小板減少性紫斑病）で四月末に代々木病院に入院しちゃうんですよ。目黒の他の組合は、春闘でそこそこ取ったようですよ。僕らが頭を抱えて地区委員会に行くと、中川英司さんや肥後さんが「利根ボ一リングがすごい」「本多通信がすごい」と言っていました。肥後さんは目黒から南部地区委員会の副委員長になって離れ、前田さんが地区委員会は「雲の上」と言っていた。

春闘前に目黒電波ではちよつとした人事異動が出て、「勝手に人を動かせないように闘え」と前田さんがあったこともあり、その対処で疲れました。協定を取ったんですが、三〇年後にそれだけの協定を取った組合は、当時もその後もまじないということが分ったんです。

それから、確かこの春闘の時期に会社にドロボーが入り、組合のロッカーがこじ開けられた。峰岸さんに、光南では六三年にやられたと聞いたので…。

《六二年夏冬の一時金》

藤井 丸山さんが暗殺されたことは、代々木病院の病室で知りました。変速の宍倉さんも同じ部屋にいて、隣の人が新聞の見出しを読み上げたらびっくりして体を起こしたことを憶えています。組合は夏季一時金闘争に進むんですが、一発回答だったか、金額はまあまあものなんだけれど、難航していました。病院まで「同志」が何人

も来て相談したこともあった。

一人人位になつてたの？

藤井

前の年の一二月からは、増えるのがしばらく止まつてました。一四名のままだったと思います。一時金は、七月末僕が退院してすぐ妥結したんですが、分割払いの二回目だったか、「払えない」と言つてきた。昨年から手形が三〜四ヶ月になつていて、「黒字倒産」の危険もあると言つてます。また妥結の時、会社は一時金闘争中、「会社の施設を勝手に使つた」と、組合役員に始末書を書けと言つてきた。これを跳ね返すのに、地区労から西川久仁さんが来て、団交に入つたこともあります。この時は、代々木法律事務所に行つて相談しています。しかしあまり抵抗しないで、会社は撤回したんです。払えなくなつたからのようです。

この一時金の支払いは延びに延びて、その間に組合は年末一時金を要求します。この頃になると組合内部も無言のまま、まとまり始めていました。こんな時、西川さんに偶然あつたんですが、明工では一時金が出たから「ちよつとその辺で」と言つてラーメン食つてビールを飲んで話をした。自分の意に沿わない場合、「執行委員会として、それが大会の議決なら従わなきゃいけないだろうか」といったら、西川さんが「そうだ」と言つて、

「吹っ切れた感じがしたもんです。結局一時金は、夏の分も含め来年の六月に払い終わるということ、決着しました。」

《六三年春闘で労務屋・飯塚を追放》

藤井

六三年春闘ですが、細胞の若い人たちが「これではいけない」と考え始めた。一方天野さんですが、六二年六月頃女の子ができた。それが兎唇（みつくち）だったんです。東京医科歯科大で手術することになったんですが、入院してすぐ何かに感染して、何度も輸血に通つて大変でした。六三年二月頃だったか亡くなつた。僕らも病院に行きました。霊安室にね。寒い夜だった。その初七日に天野さんのところに何人かで行つたとき、また春闘をどうしようかという話になった。天野さんの兄さんが来ててね、前年秋に四中総が出てたから、判りやすい助言をしてくれたんです。先生だったんですね。レッドページされた人らしい。そんなことで少しづつ元氣を出しながら、職場討議のやり方なんか考えて、進めて行つたんです。

丁度地方選挙の時、殺された丸山さんは区議候補だった。代わりに西山さんになつていたんですが、会社（東京電波工業）の反対でだめになり、六三年一月に西川久仁夫さんになった。久仁さんや都知事坂本勝候補、都議

会岡進候補の選挙活動もやりながら春闘もやる。メーデーの前夜祭を公会堂でやってね。岡さんや社会党の候補者が挨拶した。大松さんや西川久仁さんも来ていた。前夜祭が終わる頃に社会党の人が来て、「東龍太郎のポスターに偽証紙が張ってあるというニュースが今入った」と言っていました。

春闘では、労務屋・飯塚が組合をなめて、鼻の先であしらうような態度だったんです。組合は大会を二回やってスト権を確立し、公開団交で迫った。それでも飯塚は一人で応対し「部長を出せ」という組合の要求に「部長はいない、〇〇電器に行っている」と言い張った。島田が出て、「社内に居た。俺が呼んで来てやる」と言って部長を呼んできた。「いない、いない」と言っているところに現れたから、飯塚はどうしようもなくなった。これで会社は労務屋・飯塚を辞めさせちゃう。飯塚は手なづけた管理職たちに金を借りていて、総額一四万円です。また出入りの蕎麦屋なんかに付けを払わず、これも一〇万円を超えていた。そんなこともあったんですね。

メーデーの五月一日、組合のかなりの方はデモに出ていたんだけど、会社では社長が主だったものを集めて「これからは会社にずっといた人に、組合との話し合いをしってもらう。飯塚を使って組合をつぶすといううわさがあ

るが俺はそんなケチなことは考えていない」とぶつた。事実上の敗北宣言でしたね。

六三年春闘は、その後組合の要求に対し、一時金未払い分は、必ず六月末までに払う、途中入社者の是正は六月から実施、夏休みは祝日振り替えなしで六日間、メーデーは休日、七月から土曜は三時終業とするなど、次々に譲歩し、最後に賃上げとして住宅手当一千元を出すこととなって終わりました。組合も生き返えっちゃった。

一その後順調に進んだんでしょう。七〇年代はじめには労働条件の水準も高くなりましたね。

藤井 いや、我が組合は、今話した六一年一月から六三年四月、のほか六八年から七二年四月頃まで、それと八三年から八六年七月までの三回、「危機」に直面しています。六七年一〇月に創業者の二村社長が急死して、三和銀行の支店長をしていた、増子昇が（請われて）社長になってやって来た時が二回目、それを乗り切って八三年、受取手形約三億円が不渡りとなり、ユニセフ社・宮越が乗り込んで来た時が三回目でした。この時は、「ご承知のように、僕を含む一五名の首切がありました。それから最後に倒産。地区労やその他多くの組合におんぶに抱っここの三〇年でした。

一その「危機」のほか六三年以後の主な事件などについて

簡潔にお願いします。

藤井 六三年秋投票で書記長にされました。年末一時金は春闘勝利で団結を回復して闘い勝利。支払いが一回でなく分割だったことから、労金で何とかならないかと考え、とにかくこの時に労金に加入しました。翌六四春闘の準備中、副委員長の池下が「アカハタ」に春闘のことが何もう書いてないと不思議がっていました。さらに共産党は、「三月を農民月間とする」と決めたこともしつくり来ません。そして例の四・八声明。これによるビラまきに細胞は取り組みました。ただ自分たちの春闘は、時限ストなどやり一五〇〇円の賃上げと、土曜半ドンなどを取りました。

四・八声明でストを止めたのは間違いだとなり、以後いろいろありましたね。自己批判しても、元には戻らないことを痛感させられます。

この春闘の前後に、二人の組合員のアバートが火事になりました。ひとりには西川忠二夫人の弟。火災共済に入っていないかった。火災共済は五〇年代に組合に入っていました。もう一人は後藤さん。彼は火災共済に入っていないで、一〇万円が支払われました。こんなことで六四年夏に組織共済に入りました。不幸にしてその秋二人の組合員が相次いで亡くなりました。

六五年には池下副委員長が野坂選挙の常任になる。社長が認めてくれ、騒ぎにならずに済みました。

秋には日韓条約反対のデモに何度も参加しました。六六年春闘は五年振りの四〇〇〇円賃上げ。ここで天野氏は委員長を降り、池下氏が新委員長になります。中国の紅衛兵から、日中友好協会の攻防のことで、委員会ですれに参加していた社青同の委員と僕がやりあい、後で仲間に注意されました。みんなの要求と離れた議論になっていたんですね。「有利、有理、有節」これは毛沢東がおかしくなった後で僕たちが心がけたことです。このころから労使の争いはほぼ無くなって来て、六七年八月、僕も書記長を降ります。

《二村社長の急死、新社長による分裂攻撃》

藤井

ところがその年の一〇月、社長の二村氏が、冠状動脈切断で急死します（五八年暮れ土橋専務が同じように急死しています）。次の社長は一族の中で、なり手が無く、会社「首脳部」は三和銀行の支店長をしていた増子昇氏に頼みました。これから労使関係はギクシャクしたものに舞い戻り、組合攻撃も復活しました。

六八年春闘以後、時限ストはやるんですが一発回答で押し切られることが続きました。

七〇年年末一時金では、時限ストと職場のリレースト

など長い闘いをして突き崩すことができないまま終結。

この後に会社は生産性本部?の協力を得て、組合切崩しに入りました。会社は、勢力を結集して第二組合を狙ったようでした。同時に嶋田に「赤旗」の社内配布を禁止する旨の通告をしてきたんです。これに対し組合では、池下委員長がこの通告を撤回するよう要求書を出し、にらみ合いになった。共産党支部は地区委員会の指導も受け、配布方法を変えるなどの対処をしました。ところが、当時国会で松本善明議員が、日立武蔵工場で、田中さんの支援者たちに会社側が水をかけたことなどを追及。労働省側から、共産党員や支持者であるということと差別や制約されたりすることは許されない、「赤旗」配布は、就業時間中以外なら自由であるとの回答を引き出したのです(「赤旗」七一年二月二日付)。目黒電波は、この答弁を『重く受け止めた』ようでした。

七一年夏季一時金ではスト権投票で三分の二を得られなかったものの、「賛成」と文字で書かれた「無効票」を含めると三分の二を超える結果となり、池下委員長が掴んでいた、第二組合の動きのごく一部を暴露したこともあり、分裂攻撃は早くも弱まり始めました。この秋から後藤さんが委員長になります。

《72春闘から再び前進》

藤井

七二年春闘に取り組み始めた頃、天野氏と時限ストについて話し合いました。時限ストでなく一日単位のスートを構えるべきではないかと。二人とも同じ考えたっただけですね。天野氏が口にした「日炭高松方式」という言葉で気付きました。知らず知らずのうちに、これに引きずられていたんです。

時限ストではないストと、唐が崎地域の共闘で、増子社長に対し始めてはつきり勝利しました。賃上げなどの要求だけでなく、一発回答打破が、多くの組合員の要求になっていたんです。さらに第二組合派の動きには、組合の中から公然とした批判の声が出始めたんです。

七三年・七四年春闘は、会社の抵抗がさらに頑強になって、ストも長引いた、七四年には四月五月の給料期間にまたがってのストを打ち、会社を屈服させた。このころには一般組合員が車も使って第二組合グループの動きを監視・牽制するようになってましたね。

《七五年のレイオフ》

七五年は、第二組合作りの中心人物を解雇させたことから始まりました。その後、第二組合の動きはなくなりました。会社は前年末に成立した「雇用保険法」で、レイオフを組合に申入れてきた。労働省が労政事務所が中小企業の担当者呼び「説明会」をやったらしいんです。

「雇用保険法」とは何か？ 「労働運動」には毒饅頭とあるが……。高岡さんの紹介で、僕が石母田議員の部屋を訪ねて、秘書から教わり、資料をもらって来たんですが、従来の失業保険法が雇用保険法に替わり、給付が改悪され、雇用調整給付金制度が新設されると言う、中心部分が伝わっていない感じでした。団交を重ね、賃金一〇〇%、全員が「必要日数」レイオフされることで合意しました。

地域共闘は、七四～七五年と統一ストなど打ち活発だったんですが、七四春闘後に、七洋が「偽装解散」でやられ、七五年は理化電の春闘が長引き、秋に首切と第二組合の攻撃が来ましたね。理化電の春闘には、目黒電波が指名ストでピケ破りに応援を出して、対抗したんですが、「こ」までやるとは思っていませんでした。僕の場合、この頃からようやく個々の組合の企業内の闘いの限界を感じるようになりましたね。また、重要な情報が上にあがっても横には流れない。資本の側の組織的な攻撃に、個々の組合が不意打ちを食って、慌てて闘ってるんじゃないか？こんなことを感じるようになり、今もそう思っています。千代田総行動という言葉も、中身が分からず、遠い世界のこのように感じたものです。

《銀行の「支配」？》

藤井

六三年、まだ前年の夏の一時金も払い終わっていない時、会社が倉庫を建て始めたので抗議しました。会社は、こういうことには銀行が貸してくれる、ただし借りの半分は預金しなければならぬと言っていました。

六六年には三菱銀行を定年で辞めた元支店長が、取締役経理部長として入社。七五年にはこの人が「解雇」され、三和銀行の現役支店長が、後任としてやって来んです。どういう事なのか、組合員の妹の夫が第一勧銀にいてその人に話を聴きました。学大商店街にあった「白樺」で。銀行が人余りになっていて、支店長くらいの年代の人が、出向で他社に派遣され、「口減らし」をしているんです。

それからレイ・オフのとき、中小企業家同友会が「中小企業における労使関係の…」というのを出したことを知り、そのパンフを買ってきて、後藤委員長に見せました。それが社長に渡り、増子社長は同友会に入ったんです。

《岩通に身売り、次いでユニセフに》

七八年以後、八一年位までは、会社との大きな争いが無い状態が続きます。倒産を考え、弁護士との連絡を密にした、技術部長の「趣味」で、赤字の受注を続けたせいで左前になり、増子社長は組合にも他の重役にも秘密

に、三和銀行と謀り、岩崎通信機に一億円の増資を仰ぎました。八二年三月だったかな。組合との蜜月はここまです。

翌年三月、受取手形三億円ほどが不渡りになり、岩通は手を引く。希望退職などで多くの人が辞めて行きました。岩通の代わりに救世主を装って来たのが、宮越が率いるユニセフ社です。宮越の目黒電波での会長就任の挨拶は「、ストをやるなら一ヶ月でも二ヶ月でもやれ」と言うものだったと聞いています。僕は「配達」でその場に出ていなかっただけです。

宮越は目黒電波に続いて、クラウン社（全金の支部があった）ほかを買収し有名になりました。管理職二〇名以上が宮越に恫喝され進退伺いを取られて解雇され、この後、組合員が次々に辞めていきました。それでも自分の組合員は職場に残り、労働条件は一つも譲らなかつたんです。

《一五名の首切》

藤井 八五年春闘中に、海野委員長が帰宅途中の交通事故で亡くなりました。春闘だけでなく、塩野元委員長の「懲戒解雇」のこともあり、執行部の負担はかなりのものだったんです。懲戒解雇が労働協約に違反することを指摘する者は、少数派だったようで、それやこれやで、今ま

で頑張っていた元執行委員二名も会社を去りました。

海野委員長の後任に、元委員長の天野氏を据え、組合は会社の終業時間帯の変更や、毎日のように会社に仕掛けられて、あれこれと闘っていました。僕に委員長をとという話もあったのですが、妻が入院中で、三人の子供がいたので断りました。こんな中で僕を含む一五人の解雇が通告されました。八月二十七日でした。後でだんだん分かってきたんですが、宮越が六千万円の軍資金を出し、二見という男が滝本社長の軍師として動いていました。二見は当時の公明党代議士の弟です。組合大会で首切りと闘う決議をしようとしても、会社の出席妨害で成立しないという状況でした。首切前、会社は「希望退職」を「募集」したのですが、僕は甘く見ていたんです。夏休みに開いた「支部会議」で、関根さんは指名解雇を心配していたのに。

九月二日から一三名が会社の門前で闘いを開始。会社が組合事務所を閉めたことに、「事務所使用妨害排除」の仮処分を取って反撃しました。仮処分を取るのに力になった一つが、僕が書記長だった最後に、春闘で交わした「組合事務所貸借契約書」で、よく残っていたな一と思うんです。一八年ですから、事務所も三回替わっているし。これが勝利の始まりで、一二月四日には仮処

分の審尋が終わり、その夜、目黒労協を中心に、品川労協、全金南部地協、電波共闘による支援共闘会議もできました。

四月一日、仮処分に勝利。社長は「地位保全」が認められなかったから、会社の勝利だと社員に説明したそうです。八月、宮越は社長を更迭し、事態の收拾を図りました。木野新社長との交渉で、首切の無条件撤回、バックペイ、解決金、弁護士費用などを取り、全面勝利でした。

その後分かったんですが、闘い始めて一ヶ月ほどで、社長に協力していた組合員の一人が、門の外で連日闘う我々を見て、はっきり社長との協力を断ったそうです。また軍師二見は、六千万円のほとんどを持って失踪、税務署が追いかけていると言っていました。

《NTT株、倒産 最後の闘い》

藤井 この首切の際、何人かが組合を脱退したんです。弁護士の指導もあって、争わずオープンシヨップ制に移行しました。それでも勝利後脱退者は出なかった。木野社長との間ではとくに揉め事もなくなって、まあ三度目の「蜜月」ですかね。九一年には新入社員に働きかけ、一三名だったか、二十歳前後の若い人たちを組合に迎えました。

しかし、宮越は、首切解決後、すぐにNTT株での儲けをたくらみ、目黒電波の土地建物などを担保に借り入れて、八七年一番高い時期に株を買いました。株価はすぐに下がり、損害総額は二百億位だった？そのうち五十億円は目黒電波に押し付けられたそうですが、その時は知りませんでした。宮越は、さらに株などで赤字を重ね、目黒電波をNBCC社に売り払いました。九一年九月です。

そのNBCC社が先ず破産。九二年三月です。組合は関根さんの指導で、いわゆる「譲渡協定」（事前協定）を取り、万一に備えました。あと一年で僕は定年（六〇才）になるが、それまで持つのか？最悪の状況で失業保険と年金がつかぬが六月を過ぎ、不安を抱えながら、夏休みは高橋さん、村井さんらと「福島事件」の探索に行きました。井上氏も参加して車を出してくれました。

その一週間後です。日曜日だった八月一六日夜、社長らは会社を抜け出し、電話で社員に翌日の自宅待機を指示、組合執行部が替わって社屋に入り、一〇年を超える争議が始まりました。最初の半年、若い組合員がよく動いてくれました。

闘う相手は、目黒電波とその代理人、宮越とその表看板のクラウン社（宮越グループ）。賃金を支払わせる、売

り上げを差し押さえるなど。「賃確法」による退職金では、解雇を認めていないからと、払わない労基署に押しかけて交渉し、さらに労働省にも行き、支払わせることができました。

宮越グループには、須藤弁護士と鈴木弁護士が考え出した「詐害行為取り消し請求」の裁判と、社前の抗議行動で攻めました。裁判は和解になり、宮越の出身地の信州新町まで行って不正行為を暴いて成立させました（二〇〇〇年暮）。

この後は和解で得た会社経営権を行使しての、会社前代理人との「交渉」を皮切りに、会社「整理」を終わるのが二〇〇七年三月です。僕自身は九七年、妻が統合失調を発症、また肝硬変にもなっているのが判り、最後の〇六年一月以後は全く何もできませんでした。

首切、それから倒産争議では、地区労はじめ多くの労働組合や地域の方々、東京争議団などと共に、須藤、鈴木弁護士をはじめとする弁護士団に大変お世話になりました。

《労働戦線の混乱?》

藤井 全労連ができて、労働組合運動は大いに良くなると

僕は思っていました。

ところが、目黒地区労では多数決の強行で、いくつか

の組合が脱退したことを井上氏から聞き、驚きました。さらに多数決で「浄化」されたはずなのに、「第二地区労」ができたことも理解できずにいました。もつと驚いたのはある争議団の態度です。その神奈川の争議団は、我が組合にピラマキなど大森での行動への支援のオルグに来たんです。会社会長宅が、宮越邸の近くにあり、こちらもピラなど一緒にやりたいと申入れたんですが、その後に来た返事は、全労連に入っていないとことは一緒にやれない、目黒区労連か、最低春闘共闘の推薦が必要だと言うんです。その時は、我が組合は、その争議団のピラマキに参加し、別に我々だけで自分たちのピラも撒きましました。これが全労連かと失望したもんです。その後、次に神奈川の東電、日立、東芝などの争議団の事情が分かってきました。セクト主義と言うことだけではなさそうです。

八五年、首切争議で東京争議団に入った時、そこにいろいろな傾向の争議組合がいる「アイデン」という組合は、宮越に会社を買収されそうになり、わが組合ともちよつと接触したところです。三役が核マル？だというので注意はしていました。そこも一緒にやっていました。

一つの回答を見た思いました。いま「一点共闘」と言っていることを、多くの労組や争議団共闘は、前々からや

っていたんですね。とくに東京争議団共闘会議の懐の深さには教えられました。

しかし倒産争議をやる頃には、金属反合は東京争議団とは「独立」し、神奈川の争議団の問題、その他個々の争議組合は相互に助け合っているのに、全体としておかしい。こんなことを倒産争議中に思いました。

争議が終わった時七四歳、一九六〇年から数えて四七年。技術屋としても、組合活動家としても、中途半端に終わってしまった感じがします。

《嶺岸金也氏略歴》

組南部支部光南印刷分会を公然化
委員長。

一九三八・昭二三 宮城県北西部の山村（隣は山形

県）に生まれる。

一九四五・昭二〇 国民学校入学

同年八月一五日 敗戦の玉音放送を聞く。

一九五四・昭二九 県立農業高校に入学。

《職歴》光南印刷まで

一九五七・昭三二 三月 高校卒業と同時に、港区の洋食

器製造販売会社に住み込みで入社、その後、自動車整備、部品製作会社（旋盤を習う）中央区の伊坂印刷（三年間で印刷技術を習得）。

《活動歴》

一九六一・昭三六 一月 社長の交代制継続発言を切っ掛けに組合作り始まる。（毎日曜集

合）

一九六二・昭三七 三月一〇日 東京出版印刷製本産業労

一九六三・昭三八 四月二日 暴力弾圧事件発生（書記長

大けが）六五年三月加害者有罪判

決・決定 六六年一〇月民事裁判・

勝利判決。

一九七二・昭四七 個人加盟組合解散が出され。大手

組合代議員多数で決定。

一九九五・平七 九月 企業閉鎖、解散に伴い組合解散。

一九九六・平八 めぐるユニオン結成、会長就任。

《戦争体験 学校と敗戦》

一それでは、嶺岸さんの聞き取りを始めたいと思います。
まずは出生地や子供の頃の思い出、戦争体験などについてお話ください。

嶺岸 私の生まれ育った所は宮城県北西部で、隣村は山形

県で、奥羽山脈の麓ですね。昭和四五年四月に国民学校に入学しました。いつも校庭では軍隊の初年兵が訓練をしており、整列させられ、頬を殴られ、朝からずうっと地べたを這わされ、蹴っ飛ばされ、殴られている姿を見ました。そういう姿を見て毎日子供心に「ああ、兵隊には行きたくないな」と思っていました。当時学校は弁当

を持って来れない子供が多いので、昼前に終わってしました。

八月十五日「玉音放送」があるというので、我が家の庭に筵を敷いて二〇人くらい集まっていました。部落には九〇数軒の家があつたんですが、ラジオを持っていたのは一二、三軒しかなかつたんですね。その時はラジオを縁側に出して聴いたんですが、みんな泣いていましたね。「何で泣くのかな」と不思議に思つて母に聞いたら「ああ、日本が戦争に負けた、これで終わった」と言うことだつた。私は、そのことを聞いたとき「ああ、これで兵隊に行かなくていいんだ」と思つて、もううれしくて、うれしくて、つい「いかつた、いかつた、万歳」といつてしまつたんだよね。そうしたら、母が「何言つているんだ！西の家も、東の家も、前の家もお兄ちゃんが死んだぞ、喜ぶバカがいるか！」と、まあ怒られたね。

《戦争体制と没落》

親父の時代は、今で言う女工哀史の製糸工場を手広く経営していた。絹製品の不況で多額の負債を抱え込み倒産に追い込まれたそうです。七十七銀行、富士銀行に担保物件として四〇町歩の土地を失うことになつたそうです。病氣になつて万事休す。父は村役場に勤め、昭和一〇年から定年の二四年まで収入役を勤め、その後村会議

員になり、農協の設立に参画し初代理事長を努めました。中学時代の思い出は特にありません。

《高校進学》

うちは、女が六人、男が五人、計十一人の兄弟で、僕は男の五番目で四男は病死でした。父をはじめ、長男から妹まで同じ県立の農業高校に行つていた。

その頃、父親が村会議員をやりながら、農業高校のPTA会長をやつていた。それで勉強せずに落ちたら恰好が悪いと、夜は進学担当の先生の所で付け焼刃の勉強をしました。後で聞いたんですが、八〇人中三八番で受かつたということでした。

この高校は、県内でも一番大きな農業高校で、六二ヘクタールの土地を持っていたんですよ。米、麦、野菜、果樹、畜産これが全部あつて、普通科、農業科、畜産科、家庭科、被服科と五つの科目があつたんですね。それに定時制があり、女性もいっぱいいたんですね。一学年七クラス、二八〇人以上いて、全校で八〇〇人、それが春になると一斉に畑作業に出るんですよ。

いい思い出しかなかつたですね。三年間自転車で片道一五キロ、冬はバスが途中までで、毎日四キロの雪道を歩いての通学でした。

《卒業して上京、洋食器会社へ》

東京に来たのは、次男以下はもうみんな口減らしです。田舎には、就職するところがないんだから。昭和三二年、高度成長が始まる一寸前で、あの集団就職列車が出始めた頃ですね。私は、三月一九日に卒業して、二日には上京していったんだよね。家にいたのは二、三日なんだよ。

東京に出てきて港区の洋食器の製造販売の会社に住み込みで入った。お店で「いらっしやいませ」の店員が半分、ところが外人客が多く、言葉が通じないんで「君は、店は無理だな、倉庫へいけ」と言われた。

倉庫（港区飯倉五丁目）では、在庫整理と食器磨き、そんなことばかりでした。東京タワーの建設基礎工事が真っ最中でした。本社は丁度新橋と虎ノ門との中間に東海銀行があつて、その隣にあつた中里洋食器(株)というところに入社しました。

上京して一番困ったことは、洋食器会社のためすべてが様式、トイレもそれまでの股割り式から腰掛式で出てこない。それで裏の芝公園の公衆を利用せざるを得ませんでした。朝は六時に起きて、七時までに自転車で虎ノ門の本社へ行って飯を食って、八時には倉庫に出勤する。

昼食は弁当みたいなものを持ってこられて「これを食べ」と言われ、夕方六時頃夕飯を食いに自転車で行って、

又戻って来て、いつも九時、一〇時ごろまで残業手当もつかずに、住み込み「ただ部隊」ということでこき使われました。休日は、月に二回だけでしたね。給料は手取り月二八〇〇円位でした。

《自動車整備会社へ》

「こんな会社やだな」と思ってたところに、定年で辞める年配の人が「嶺岸君、ここにいづまでいても展望ないよ。俺が良いところを世話するから」と言われて行った所が自動車の整備と部品を作る会社で、そこに入った。

その会社は、同じ港区内で、慶応大学を一寸行った古川橋というところで、通称魚藍坂というところにあつた。「嬉しかったですね」そこには賄のおばさんがいて、寮生は朝、昼、晩温かいご飯が食べられる。これが何とも言えなかったね。そこで初めて口にしたのがメンチカツなんです。生まれて初めて食ったのよ。「これはなんていう揚げ物ですか」と聞いたら、「ひき肉と野菜を混ぜて、こねて揚げたもので、メンチカツっていうんですよ」と言われて、それからすっかりメンチのとりこになりました。今でも大好きです。

翌年の五月の連休に、車の中でクラリネットを吹いていたんですよ。そうしたら寮の一つ上の先輩が車に入ってきて、「寒いからエンジンかける。これは整備が終わっ

ているから大丈夫だよ」っていうんだ。エンジンをかけたらかからないんで「かからないよ」と言ったら、「二、三回やってみな」っていうから、強引にやったらね。そのうちに床のほうから煙が出てきたんだよ。先輩に「煙が出ているよ」って言ったら、「おかしいな、これ整備が終わってんだよ」といった。ボンネットを開けたら、何のことなく、もうキャブレターは外れてる、全部バラバラになっていた。整備中はボンネットを開けとかなきゃいけなかったんだよ。それを全部閉めてワックス缶とウエスが置いてあったんだよ。自動車会社では、ワックスが置いてあるということは、整備が終わって、拭き掃除も終わったという印なんだよ。そうしてあったんで、悪いのは、その先輩の整備士だってことになったんだけど、整備士が一人しかいないので首にできない、それで「エンジンを開けたのは誰だ」って事で、「俺だ、先輩が『エンジンジンかけろ』言ったから」と言ったら、「『スイッチを入れてキーを回したのは誰だ』と言ってるんだと聞いているんだ」と言うんだ。「私だ」と言ったら、「じゃあお前だな、首だ」と言われた。それで結局二日間、燃えた車の塗装はがしを全部やって、塗り替えが終わったら「はい、君はもう出たっていいよ」「すぐ出て行くところがなかったら、五月いっぱいだけは寮にいて良い

から。その代り飯は出ない」って言われた。地獄でしたね。

《沖仲仕から印刷工場へ》

それで、五月から一〇月まではアルバイトをやったんだよ。あの頃のアルバイトは、土方だとか、永代橋の沖仲仕なんだよ。俺は江東区の洲崎にいた、昔の女郎さんがいたところだけ金がなかったから関係なかった。

沖仲仕がいちばん多かった、船着き場が多かったからね。俺は高校時代から一寸とボディビルをやっていたもんだから、米一俵、六〇キロを担ぐのを簡単にできちゃった。そんなこんなで重宝がられて、日銭を稼げた一番が沖仲仕で、土方の倍ですから。あのころ、ニコヨンと言ったのが日当二五〇円の時代だから、土方で五〇〇円、沖仲仕は八〇〇円から九〇〇円だからね。半日働ければ、もう二日食べられる。

そんなことばかりやっけていもしょうがねえなということ、深川にいた叔母の知り合いで、仲良しの井坂印刷という処の工場長に「家に力持ちの男が一人余ってんだけど、何とかならないかね」と話したら、「ああ、丁度今人手が足りないから、力があるなら是非お願いします」ということになった。其の頃はじまりだしたコンピューターにかける紙の印刷機が増えてきました（フォーム印

刷)そこで出会ったのが横堀君 俺より小さかったんだ。それから彼は伸びたのびた、見上げるほど伸びた。そこで三年間やって、印刷技術も身についたころ、細川活版の目黒工場というのができた。新しい機械が入るので職人を募集していた。

《細川印刷目黒工場＝後の光印刷へ》

印刷機メーカーのセールスマンが「機械を入れるので、職人として来てくれないか」と一か月前に引き抜かれた先輩が「今度こういう機械を入れるから、どこかに職人がいたら探してくれ」と言われて、俺と横堀君がそれに乗った訳だよ。目黒の唐ヶ崎にあったんだけど、俺たちが行った七月には事務所もなくて、機械が二台分くらいしか入らない工場だった。まだ社長が居なくて、細川活版からの進行係みたいのが来ていて、看板も「細川活版管理目黒工場」となっていた。一〇月ごろになって「光南印刷」という看板が掛かって機械も四台になった。

《組合作り始まる》

一 光南印刷での組合づくりについてお話し下さい。

横岸 六二年の一月一五日の成人の日の朝の朝礼で、成人になった何人かの青年にネクタイを一本やって、「これからも一緒に頑張ってくれ」という話に、「今年も二交代制勤務の体制で続けたい」というのが会社から出された。

前の年もずーとやってきて、その後六一年の十一月、一月は交代制で、一日一二時間の労働時間で、きついんだよ。朝の八時から夜の八時まで、次の人は夜の八時から朝の八時までで、夜勤の場合に手当てが一寸ついて少し増えるだけ。本社の細川活版は五割増しで、こちらは二割五分なんだ、やんなっちゃうよね。

それで、その成人式の帰りに酒が出たんだけど、とにかく飲み直しということで、俺と横ちゃん借りていた清水町の四畳半のアパートに集まった。アパートは、もう一本隔てると品川区、稲荷通りの坂を降りて、エスエス製菓の手前どころにあった

一 光南印刷には何人くらいいたんですか？

横岸 若いのが二〇人くらいだ。其の内の一二人から一三人が集まった。炬燵にひまわりみたいに足だけを突っ込んで。「もうこんな会社じゃ、やってられねえなあ」と、みんな辞めることばかり言うんだよ。だけどこれらの仕事だから、みんなも面白い仕事だとは分かっているんだ。「だけどこんな労働条件じゃ、やってられない」というところで、少しでも技術が身に付くと機械屋から「今度どこに機械が入るんだ」と情報探しをするんだ。それが知恵になって皆辞めたがるんだよ。それでは拙いと、来週、今度の日曜日にまた集まろうじゃないかと言

ってさ。で、いつも一二、一三人が集まるようになったんだよ。

其の内に、二回目か三回目かな、二月になって月初めの集まりに全印総連の専従で、東京地連の愛久沢という人と細川活版の大井工場で、詩人の津布久さん、蒲田さんが来てくれた。「ここは」細川活版の目黒工場なのだから俺たちがちゃんと来て指導する」といつも来てくれた。

《公然化の準備中に会社にバレ 第二組合が先に公然化》

「このままじゃどうしようもないから、三月初めに東京地連の統一要求を出すから、それと一緒に合わせて組合を公然化する」という指導があった。「要求提出日が三月一〇日だから、細川活版も出すから三月一〇日に公然化して要求を出す」と言うことになった。それで毎週日曜日には、必ず日曜日に集まって、いろいろな経験を交流したり、労働組合法、労働基準法の学習をした。二月の半ばには、公然化する時の分会長、副分会長、書記長、財政の担当を決めた。初代の分会長は私で、横ちゃんは金銭的にしっかりしていたんで「俺がやってもいいよ」というので、財政を担当してもらった。書記長は村田さん。

同盟は俺たちが公然化する一週間前に公然化しちゃっ

たんだ。俺たちが集まっていたのがバレちゃってたんだ。

「どうも若造どもが集まって、なんかやってんな」でなことだね。こちらが公然化する一週間くらい前に、「新しい労働組合ができましたので、入っていない人はぜひ入ってください」との社長の訓示があった。

《個人加盟して分会を公然化 組合否認で労働委員会へ。そして勝利》

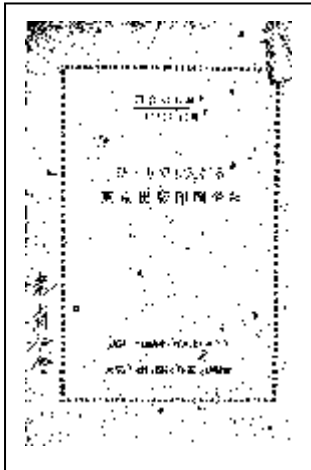
一最初から個人加盟の組合だったんですか

横岸 その時に、東京地連の方から「これからは個人加盟

の時代だから、個人加盟でやった方がいい」と、全印総連の人が来て、個人加盟の組合がどういう組合かという説明をうけた訳です。(資料③) ↓

【資料③】

東京出版印刷製本労組規約



東京出版印刷組合第一編

本部業務

文書業務

東京出版印刷組合第一編

第一章 組合の組織

(1) 組合の組織

(a) 組合の組織

(b) 組合の組織

(c) 組合の組織

(d) 組合の組織

(e) 組合の組織

(f) 組合の組織

(g) 組合の組織

(h) 組合の組織

(i) 組合の組織

(j) 組合の組織

(k) 組合の組織

(l) 組合の組織

(m) 組合の組織

(n) 組合の組織

(o) 組合の組織

(p) 組合の組織

(q) 組合の組織

(r) 組合の組織

(s) 組合の組織

(t) 組合の組織

(u) 組合の組織

(v) 組合の組織

(w) 組合の組織

(x) 組合の組織

(y) 組合の組織

(z) 組合の組織

東京出版印刷組合第一編

本部業務

文書業務

東京出版印刷組合第一編

第一章 組合の組織

(1) 組合の組織

(a) 組合の組織

(b) 組合の組織

(c) 組合の組織

(d) 組合の組織

(e) 組合の組織

(f) 組合の組織

(g) 組合の組織

(h) 組合の組織

(i) 組合の組織

(j) 組合の組織

(k) 組合の組織

(l) 組合の組織

(m) 組合の組織

(n) 組合の組織

(o) 組合の組織

(p) 組合の組織

(q) 組合の組織

(r) 組合の組織

(s) 組合の組織

(t) 組合の組織

(u) 組合の組織

(v) 組合の組織

(w) 組合の組織

(x) 組合の組織

(y) 組合の組織

(z) 組合の組織

一人でも交渉権があるんだ、一人でもね。もし一人首切られたら、組合員みんなで反対すればいいんだけど、中にはそういうのをしたくないという人がいるかもしれない。それでも一人でもやんばやいけなさい」となって、一人でも闘えるんだと。確かに、一人で闘って戻ったやつが何人かいるんだよ。ラジ高速分会の小林もそうだし、東京でも何人もいるんだ。そういう話を聞いていると力が湧いてくるんだよ。一四、五人いれば心強いよ。「よし、やろうじゃないか」と言うことなんです。公然化したら、会社は即「この要求は認められない」と団体交渉を拒否。それで、東京都労働委員会に団交斡旋を出して交渉した。

《労働委員会で勝利解決》

一「唐共」（唐ヶ崎共闘）の取り組み、会社を圧倒したようですが？

唐共 当時は労協と言うより、唐ヶ崎共闘の方が身近だった。理化電機なんかも同じ世代だしね。目黒電波測器にはお世話になったよ。共闘では、組合で要求を出したのをお互いに助け合おうというのが原点ですよ。だからどここの社前で集会をやる」とかさ、そういうのが頻繁だった。当時「唐共」に入っていたのは、明工社、光南、

目黒電波（測器）、理化電機、三光自動車など、あと清掃なんかも来ていたね。

区職（目黒区職労）は青年部が顔を出していたね。区職労のなかの村井さんは、貫禄があったからな。名前は忘れたけど、三羽ガラスみたいのがいた。それからあの頃、今の中央町ではなく唐ヶ崎と言ってたんだよ。それで「唐共」と言ってたんだけどね。光南印刷は組合ができて、六三年ころ、会社が団交拒否をしてもめていたでしょう。其の頃、明工社や目黒電波の人たちと話していたら、「抗議集会をやろうじゃないか」という話が盛り上がった。団交拒否が労働委員会に掛かっていたから、それは暴力事件が起こる前だね。それで決起集会がやられたんだ。

会社は労働委員会で、「もうね、無数の労働者がね、もう多数がね、会社へ押し寄せて、許可もしない広場を使って集会を開いた。そんな人たちと労使間のルールなんてね、私たちは結べません」と言っていた。組合側は「会社が団体交渉に応じないから『団体交渉を開け』という集会をやったんだ。それで、地域の人たちがみんな集まって、周りのいろんな労働組合の人たちが」と主張した。そしたら、労働委員会の公益委員が「そこまで運動が広がったら、会社はもつと考えなければだめですね」「新し

く労働組合ができたからって、団体交渉を拒否したら不当労働行為で、経営者としてあるまじき態度だ」とこっぴどく怒られたんだよ会社が。その時の組合側の弁護士は、代々木法律の寺村さんで、第一ラウンドは全面勝利でしたね。

「ああ、なるほど。これが力なんだ」とその時実感したね。集会の力と言うのは、そういうところにあるんだよね。直接の交渉の場で、公益委員が経営者にそうやって説得するんだから。それで結局、経営者の側が第一ラウンドは、労働委員会を巻き込んで、会社は「もう参りました」という感じで、それで賃上げ回答も二二〇〇円、当時私が一五〇〇〇円くらいですから一五%くらいですよ。春闘といっても、終わったのはもう夏が近いころだった。

《組合つぶしのための暴力事件が発生 たちちに目黒労協へ加盟》

一村田さんに対する暴力事件に対する闘いの経過は？

嶺岸 村田さんはどっかの企業で職人として働いていて、組合活動をやっていたと言ってた。すごく気性の強い人だったから「もう、決めた事はやるんだ」とね。当時のビラ貼りはすごかったよ。社長の車にまで貼るんだから、運転できない。社長専用の車にビラをべたっと貼るんだ

からね、たまんねえよ。そういうのに水をかけて剥がしていたのが、村田さんに対する暴力事件を起こした奴なんだよ。武蔵小山を中心にいた住吉連合系の暴力団員だと言ってた。

藤井 第二組合の書記長だったんだよね。

嶺岸 入ってすぐ書記長で、職種は工場長代理で、柔道二

段で空手までやって、身体がものすごく大きくて、一八〇センチ、一〇〇キロぐらいあったんじゃないかな。村田さんなんかひとたまりもないよ。コンクリートの上に、ドダーンと一本背負い、たまんねえよ。俺も見た瞬間、血を吐いていてこのまま死ぬんじゃないかと思ったんだよ。だからすぐに「一一九番に電話しろ、救急車を呼べ」って言ったんだよ。それで近くの目黒病院に担ぎ込まれた。そして第三組合の幹部やら、会社の職制連中がベットの周りを取り囲んだ訳よ。

本人は「こんな所にいたんじゃないけども、呼吸もろくに出来ない、何とかしてくれよ」と言うので、全印総連の人が連絡してくれた代々木病院に移された。目黒病院には一日しかいなかった筈だよ。

藤井 目黒病院へ行ったら「警察の人が勝手に入ってくるんだよ」と言っていた。それで代々木病院へ行ったら良くなって、言ったんだよ。

嶺岸 丁度、東京地連にもそういう話を通じていて、すぐ

手配するということだったようです。

一そのころの地区労務局長は

藤井 前田禎三さんで、専従は川島さんと中村さんでした。

嶺岸 この暴力事件が発生したんで、分会とすりや壊滅的

打撃となりました。二〇数名いた組合員が一二、三名に

まで落っこちちゃったからね。公然化した時は二七名い

ただ。二階に製本のおばちゃんたちが一〇名位いて、

公然化と同時に分会に入ってきたのを含めてね。第二組

合は全化同盟で、八名しかいなかった。それも係長が三

名、事務所の人間が三人くらいだった。

一**目黒労協加盟の経過を話してください。**

嶺岸 当時は労協と言うより唐ヶ崎共闘の方が身近だった。

暴力事件が起きる前に、川島さんなんか「三役と話し

合いたい」と来たことがあって、こういう組織があつて

「地域は、地域で団結しないとダメだから、是非入って

ください」と言う申し入れを受けました。暴力事件が起

きてさ、もうこちらから「お願いします」って、後はお

んぶにだっこでしたよ。警察に告訴状を出すのに労協の

名前がないとダメだって言うんでね。共闘会議もできる

んだ。西川久仁夫さん労協争対部長で。そして六五年に

加害者に有罪判決が出、民事裁判（損害賠償）も勝利の

判決を勝ち取って万々歳で終わったって感じだよ。

一**三光自動車労組の丸山さん刺殺事件もそのころだよな？**

嶺岸 うちが弾圧されたのは六三年だから、丸山さんは其

の一年前に子供の前で殺された。光南で事が起こると、

「ああ、また唐ヶ崎だつて、唐ヶ崎共闘は狙われている」

などと言われた。

一**当時金属の個人加盟組合の全金目黒地域支部も唐ヶ崎地**

域分会を組織していましたが、知っていましたか？

嶺岸 ちよつと覚えていないな。

一**そのほかで「唐共」の活動で印象に残っていることは？**

嶺岸 唐ヶ崎公園でやった盆踊りかな。

一**ところで嶺岸さんは、幾つだったんですか？**

嶺岸 六二年だから、二四歳だよ。みんなが若く、青年部

だよ。青年しかいねえんだから。

一**当時の個人加盟の組合の状況は？**

嶺岸 東京全体は分からないけど、印刷の南部地区協議会

があった、全員総連東京地連の中にね。其の南部地協の

中に個人加盟の南部支部があつて、そこに大黒屋印刷、

平和印刷、富士高速印刷、大洋印刷、それと光南印刷と

当初五つの分会だった。それが三年たつと一二分会で、

一番多い時で一八分会まで増えた。それに南部地協には、

機関誌印刷、東京タイムズ、新光印刷、タイムズ印刷、

技報堂などの七つの単組が入っていました。

藤井 技報堂はどうだったんですか？

嶺岸 あそこ企業内組合だった。高齢者が多く、温和な組合でした。

一下目黒にあった中島印刷はどうでしたか？

嶺岸 其の頃にはできていたよ、個人加盟でね。「課長以上

は企業の利益代表者」という規約なんかにしたもんだから、みんな機械一台預けられ、「課長」という名を与えられ、課長手当をもらって組合から出て行った。最後は女性が一人名になっちゃってね。

《印刷労働者の状況》

一労働組合運動の再生のためには中小零細企業の未組織労働者を組織しなければならぬとしてはじまり、戦後第二のうねりを生み出した個人加盟の組合と言うものがどういうものなのか。加盟する方式が一人一人の意思に基づくとということと、産業別であるという事についてどのような指導と説明があったんですか？

嶺岸 印刷産業で働く労働者は当時二一万人いて、そのうち組織されているのが僅か二万とか三万人と言われている。

ました。組織率は一割そこそこで、残りは未組織でした。其の圧倒的多数が中小で働き、一〇名以下の職場が無数にあるという状況だった。そういう状況でしたので、そ

この底上げをしなければ労働条件を良くすることができない。とにかく悪すぎる。雇用形態も臨時工、日雇い、当時の文選工なんかは全部渡り職人だった。それから機械が全自動になっていない会社が多かったから、A倍板と言ってるね、A全板とか、そういう大きな紙を手差しでできるというのが最高の職人な訳よ。薄い辞書のような紙を一枚づつちゃんとダブらずに紙ざしができるといのが超一流だね。

そういう人たちが主流で印刷業界が動いていたんだけど、若手はその下にいるけど全然成長しない訳よ。「粹な文選、小粋なチョコクジ、ベテラン紙差しウハウハ」とか言うんだよ。「見習い側でゴミ掃除ウロチョロウロチョロ」とかなんとか、そんな言い方を良くしてたんだ。「なんだお前、そばでウロチョロか」とか言われてさ。だから文選工と言えば超一流の渡り職人。どこへ行っても同じ賃金。戦前、委員長の杉浦正男さんなんかやっていた労働組合は文選工だからね。

《個人加盟での組織化一気に進む》

一印刷の個人加盟組合の活動を振り返りながら様々なことを検証したいと思います。まずは、個人加盟組合の考え方、組織形態についてお話しいただきます。

嶺岸 結局、当時は企業内組合が中心だから。企業内組合

と言うと、一定の数がいないと運営できないよ。企業内組合があるようなでっかい会社は、みな下請けをいっぱい持っていたんですよ。その下請けの所は、全部未組織な訳だから。其の未組織労働者は、大企業の労働条件と比べると非常に劣悪だった。「せめて労働時間と残業の割り増し位は、みんな同じでなければおかし。とにかく基準法の二割五分さえ払えばいいんだ、大企業はみんな三割五分、あるいは五〇%増しになっているの。何で下請けでは我慢しなければならぬのか」。この点では、「労働条件は、やっぱり横断的に全部しなければおかしではないか」とそれがやっぱり基本にありましたね。

だから、それも全部単価に乗せて、いわゆる下請けの企業も生きられるような方策をしなければならぬ。そういう要求を含めて、出すんだという風にね。経営者は「仕事をもらってるんだから、そんな事言える訳ないんじゃないか」と怒るんだよ。

一その未組織の人たちを組合に組織すると言う事になった。

嶺岸

東京出版・印刷・製本産業労働組合(前掲資料)で、当時名前の一番長い労働組合です。それができて、東西南北の各地域にできた訳だよ。全部で六支部ですかね。これは集まりやすい、さらに数がどんどん増えていくと、会議などで東京全体が集まる事はとてもじゃないけどで

きないからね。光南の組合が入ったころは、個人加盟の組合が独自に活動していましたが、一年くらいたって、全印総連と方針が同じなんだ、それだったら南部は、南部で地区協議会の方に加盟しようじゃないかとなった。支部は個人加盟だけど、地区協議会は単組の連合体だからね。それでも要求は統一要求で一緒な訳だから。

また、この個人加盟の組合は全印総連中央本部ではなく、東京地連(東京地方連合会)に加盟して、その中心になって結成した。光南ができるころには杉浦さん(杉浦正男)が委員長だった。杉浦さんは学習協の講師もやっていた。

一とくに産別会議が解散して、左派の影響力が極めて少なくなつた中で、中小・零細企業の労働者を組織し、戦後二度目の組織化の盛り上がりを築き、左派の運動を再建方向に導いたのがこの個人加盟組合だったんですね。ところで単産の中での個人加盟組合の位置づけはどんなものだったんですか？

嶺岸

組合員になるのは「各自の自覚と決意をもって入ってくれ」と言う事で、後で文句言われちゃたまらないからね。「一人一人の責任においてやろうじゃないか」と言うのがね。要求も幹部が決めたから俺たちも要求を出すんじゃない、俺たち個人のものから始まるというか、だ

から要求の数はものすごく多かったですよ。賃上げの要求だけでなく、中には「職長をクビにしろ」なっている。「働きづらい」ということで、口頭で行った方がよいなどと考えてね。要求は、一人でも出して闘える。ということですよ。

そのかわり、首を切られたら全体で反対して闘うというのが基本でした。要求はあくまで個人が掲げるものであって、ただ集約的に全体としてまとめることはしても、団体が掲げるものではない。要求は引き下げないという強い姿勢で臨むというのが最初に言われたことだね。だから要求と権利は、中途半端な妥協はしない、ただ一定の時期が来たら、止めることはありますと言った。方針とすれば、「個人の責任においてこの要求を貫徹するんだ」と言う意気込みをまず大事にしようという発想があった。そして要求の主張は分会段階でやることでしたが、そこで問題が起きたら支部と全体としてやっていくと言いう事を検討した。

《組織体制とその中での役割》

嶺岸

南部支部の副支部長で南部地協の副議長でしたよ。副議長の方は光南印刷の分会がなくなるまでやっていた。分会ができてすぐ副支部長で、ちよと早くできたフジ高

速（品川）平和印刷（港）、大黒屋（港）。港区は印刷が地場産業になっていたからね。

俺が南部地協の三役を二〇年ほどやってきた中では、全体としてみると同じ全印総連の仲間意識っていうのはすごく強かったですよ。だから単組の人たちも、「しかし、個人加盟でよく頑張るよな。俺だったらとつくに辞めちゃうよ」などと言ってるのを飲む席なんかで聞いたよ。

《画期的だった集団交渉》

一産業別の労使関係確立に向けての運動があったと聞いていますが？

嶺岸

六五、六年ころから始めたのは、「統一要求、統一交渉」の運動ですよ。そこに出てこない経営者は理解が足りないのと追究したりして、結構たくさん経営者が集まったよ。そこでは、中堅どころも、小さいところも相談して回答を出しなさいと言う事になって、結構まとまって回答ができましたよ。統一交渉で、大きいところも小さいところも全体として揃えていくというやり方でしたね。

文京の共同印刷なんかは入ってこない、企業規模がけた違いだからね。南部の平和印刷なんかは、一五、六名しかないところだけど、それが一緒になって回答をそろえて、若干の差はありますが出してきた。大洋印刷なんかは、第二組合を抱えていたから「あんたの所は少数

組合だから出たくない」と言っていたが、「今後労使関係がギクシヤクになるから顔だけは出せ」と言ったら出てきた。全印総連は全国組織だと言う事を彼らなりに勉強、理解していたんだらうね。この取り組みは画期的でしたよ。統一交渉を実現するために、経営者団体に「こういう交渉をやりたい」と言う申し入れを、二・三年前から行った結果です。

一 この運動はいつまで続いたんですか？今もやっているんですか？

榊岸 企業解散で光南がなくなる九七年頃もやっていた。対応する企業が結構集まっていましたよ。今でもやっているかどうかはわからないね。無沙汰しちやつてるから。一 統一要求・統一交渉の成果はどうでしたか？中心課題は何だったんですか？

榊岸 賃金と労働条件、労働時間ですね。労働時間では、有給休暇を半日単位や二時間単位で使えるようにする分割取得の要求で、経営者も一日休まれるより少しづつ休んでもらった方が良いと言うので、割と認められましたね。

あと労働時間短縮では総労働時間と週の労働時間でですね。「土曜を休日」と言っと、「平日を三〇分伸ばしてくれ」など、トータルでは四時間くらい縮めたところも

ありましたよ。

一 闘いの進め方の特徴と成果はどうでしたか。

榊岸 賃金なんかでは、機関誌印刷が割と回答が良かったんで、「民主経営でも、民間経営で厳しい環境の中でやっているのだから做うべきだ」と言う闘いを進めた。その結果要求のほとんどを実現させ、企業間格差も少なくなってきた。

一 光南の経営者は？

榊岸 「うちは決定権がないから細川と相談しないと、何にもできません」と言う返事で、細川印刷も出てきましたでした。

《激励交流ピラ 大手の東京タイムスで初のスト権確立を実現する》

一 さらに南部の運動で評価された激励・交流ピラ入れについてお願いします。

榊岸 それはね、大手ががんばらないと、その下請け関係の条件も上昇しないと言う事だね。南部なんかでも一番大きかったのは東京タイムスで、三〇〇人からいた。あそこは新聞を発行してただけでなく労働組合の機関紙も発行していたんだ。日本機関誌印刷は一五〇人位で、周りに製版会社とか色んな協力会社がいっぱいあった訳よ。でそう言うところに分会ができると、どうしてもそ

こんなところがネックになって「本社がスト権を立てないのに子会社がストライキややってどうするんだ」という話があったことがあるんだ。それなら交流ピラ入れをした方がいいんじゃないかと言うことになった。

六五・六年頃だよ。東京タイムズなんかは、何回スト権投票してもスト権が確立しなかったんで、それでは中小企業の労働条件の引き上げを図るためにも、と「スト権を確立して共に闘いましょう」という激励ピラを入れたんだよ。最初は、撒く前にピラを見せたら、向こうの執行委員会から「ダメだよ、こんな過激な文章は」とかいろいろ言われて文章を直した。そして、「スト権は労働者の権利だから要求を実現するために共に闘いましょう」とのピラを撒いたんですよ。そうしたら、東京タイムズでスト権が確立したんだ。

それで執行委員会が「これは画期的なことだ」とすごく評価され、南部地区協全体の評価も受けて「交流ピラ入れはいいもんだ」と言う事になった。それまでスト権が立つのは機関誌だけで、ただ「民主経営」だから実際にはストは打てないんだ。そんなこんなやっているうちに、東京全体に報告されて、「交流ピラはいいもんだ」と言う風になった。

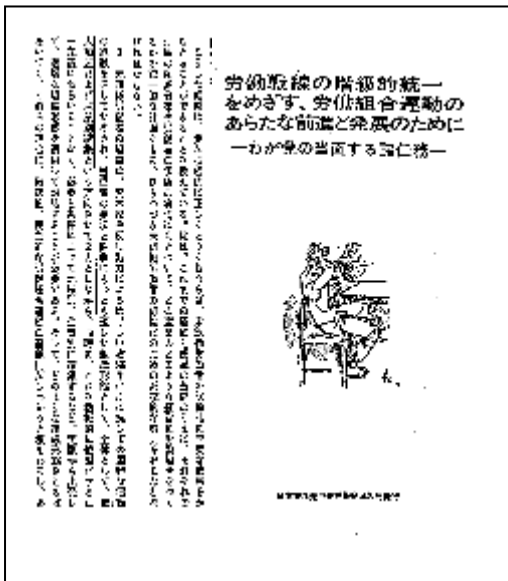
だから文京の共同印刷にも一〇分会ぐらいの連名で、

ピラ入れなんかをした訳よ。それはそれで、えらく評価されたんだよね。運動も全体として前進したから。

一目黒労協の学習会で、研究者の一人が共産党の一〇大会六中総決定（資料④）にある個人加盟の問題点が全印総連のことで、個人加盟組合が大手支部を攻撃したという記録に残っていると書いていたことがありました。この軌轢の原因が激励交流ピラ運動のことですかね？

【資料④】

日本共産党第一〇回大会六中総決定



横岸

六〇年代のころから交流ビラが盛んになった。機関紙の組合員がわざわざ光南印刷まで来てくれたりで今度は光南とフジ高、太陽印刷が東京タイムス（二七〇名位）の入り口三か所でビラをまいた。

春闘の時期に「一緒にこういう要求で闘おう」と言う組合を攻撃するのではなく、激励・交流の相互ビラ入れだった。南部では軋轢はなく、大手の細川なんかは分裂がかけられていたから、大いにやってくれということだった。そして春闘では成果を上げる取り組みとなり、東京地連として全体で運動を盛り上げるために交流ビラを大いにやりましようと言うことになった。

一じゃあ、他の企業別組合との軋轢みたいなものはなかったんですか？

横岸 ところが文京の大手の共同印刷は「余計な物を撒きやがった」と言い出したそうです。文京の支部は、支部委員会の名前で「一緒に働いている中には、共同印刷の下請けが何社あります」と言うのを載せて、今こういう要求で闘っていますので共に頑張りましようというビラだった。

これに対して、共同印刷の執行委員会が「こんな余計なことをするな。俺たちでちゃんとやっているのに、うちにビラなど撒くな」と言いに来たという話をよく聞き

ましたよ。「同じ全印総連に加盟しているのに、何でお前から個人加盟がいちいちこんなビラ撒くんだよ」と言う訳よ。飲んだ席で、文京支部の役員が「いやえらくお叱りを受けちゃったよ」というので、「何やったんだよ」と言ったら「交流ビラをうちでやったんだよ、そしたらえらいクレームつけられちゃったよ」と。

一南部のように相談してやればと言う程度の問題で、しかも地連の運動だし、個人加盟の活動の内容の問題点とは言えないよね。全印総連加盟の大手とは、ビラの内容は組合を非難するようなものではなかったんですよ？

横岸 大手は共同印刷だけで、プライドがあったんじゃないの。あとは企業内組合でどこにも入っていなかった。凸版も大日本印刷も。

《組織化の活動内容》

一未組織の組織化のための活動内容はどんなものでしたか？

横岸 春闘、あるいは秋から春の戦いの中での取り組みです。職場での要求実現の問題もありますが、いつも中心テーマに組織化の問題が入っていましたね。チラシを未組織の門前で撒くとか、「あそこは何時まで残業してる」から帰る頃の門前で撒くとかやりました。後で相談に来て「会社がこう言い出して、今職場の中でもめてんだよ」

みたいのが結構ありました。

《七一年ごろ突然に個人加盟組合の解散の動きの発生》

「どうも全印総連内の問題が個人加盟組合の活動上の問題として捉えられ、企業別組合の評価と合わせて、さらに七二年の全印総連東京地連内での個人加盟解散へと進む訳ですな。

横岸 「東京地連で掲げている方針と東京出版・印刷・製本産業労働組合が掲げている方針がまったく同じである。

なのに東京地連の傘下に一つの単位組合として加入し、大会もそれぞれ開いている。「俺たちは個人加盟で、向こうは企業別組合の連合体」と言つと、「だけど未組織の組織化も含めて全部同じだ。これほど無駄なことない」と言うんだ。「ムダ」と言うんだよ。これが大会に諮る前の中央委員会か何かで出されたんだよ。こんな話が七一年ころから始め、「財政的に困難だから専従書記を派遣は出来ない」というふうになった。あの当時、東京地連には四・五人居たんだ。そして、女の人も含めて東京出版・印刷・製本産業労働組合に二人派遣していた。それを東京地連に引き上げることだった。そして七二年に臨時大会をやって決定したんだよ。

「ところで、運動上の評価について示されましたか？」

横岸 何もなし。結局は「財政的に圧迫している。争議は抱えているし、その出費も大きい」と言うことなんだ。

どうも「中小企業で闘うから解決金もろくに取れないから、東京地連全体として恩恵に預からない」という発想じゃないかな。

「解散提案が出されたのは？またその理由についてはどんなものだったんですか？」

横岸 突然出てきたんですよ。七月の定期大会を前に臨時大会をちょこっとやるんだよ。話が出たのは七二年の春で、東京地連の執行委員会として。それまでは「要求こそ力」と言っていたのが、急に「数こそ力」と言うことになった。分かりやすく説明が出来なかつたんじゃないかな。理由は第一に、方針の二重性「二重性は手間がかかるからダメだ。東京地連の方針が決まったら、それに分会が従えばいいんだ。敢えて東京出版・印刷・製本産業労働組合という処を通過しなくてもいいではないか」と言う訳だ。

そして、第二に「東京出版・印刷・製本産業労働組合に派遣している専従を引き上げれば、東京地連全体として潤うんだ」と言う方針だった。要するに、直接分会を地連に直接加盟させれば、中間の南部支部とか、中央支部とかいう支部段階はいらないと言うことですよ。

「少数で、過激で争議が多い。其のことが全体の運動を押し上げるのではなくて、逆に停滞させている」と言うようなことだったと記憶します。最初は何を言っているのかわからなかった。その同じ方針で一〇年以上やっているし、今更なんだと言う事でした。方針がおかしくなっていくと、分會も減る、組合も減るみたいなどころだったら仕方がないかもしれないが、ずうっと発展してきている段階でしょ、増えている段階でこんな出すのはおかしいということになったんだよ。だから東京地連は、今までやってきたことを評価しない。一〇人から始まった東京出版・印刷・製本産業労働組合が公称二千名まで拡大してきたというところが一寸も評価されていない。「なんだか方針とか、財政だとかそういう言葉ばかりで俺たちは納得できない」というのが共通していましたね。

一そういう話は、組合活動していた仲間にはまったく知らされてなかった。周りでも知らなかった。先ほどの大手組合との軋轢が記されていた共産党の一〇大会六中総決定は、企業別組合の評価のやり直しを軸に、未組織の組織化では個人加盟の産業別組織を「たてまえ」に後退させて、実質的に「個人加盟でなくともいいよ」(本音)という内容でしたが(前掲)それが組織自体を無くしてしまうという風に

進んだと言っことですか？

横岸 だから「どこから出たんだ」と言う話になると、「こ

っち(共産党)のグループだよ、小野塚さんが労対のキヤップだから」と。小野塚さんは「東京地連と言うのは、個人加盟を含めて要求を大結集するんだ。だから『要求こそが力』と喋っていたが、七〇七一年になったら「数こそが力」と言うようになったんですよ。

一 小野塚さんは、どういう方ですか？

横岸 民主経営と言われる銀座印刷出身で、東京地連の書

記長を長い間やっていた人だよ。

とにかく、東京出版・印刷・製本産業労働組合を解散して、個人加盟の分會を東京地連に直接加盟する単組の扱いにするという提案なのよ。二〇〇〇名の共同印刷と七名の光南印刷と言う訳で、大会代議員は光南とフジ高速、大洋印刷を各一名と言う訳。

一 臨時大会の様子は

横岸 代議員は、単組からが二で、個人加盟が一と言う比率だから提案通り決定し、組合員の賛否を取りますということになった。結果、組合員投票では六〇〇名が賛成で、四〇〇名が反対と言う事で決まっちゃった。とにかく、グループの指導が入っても四〇〇名が反対したんだからね。中央支部の人はみんな反対、中部支部、文京

支部はみんな賛成。三多摩で三〇〇名いた行政学会印刷と言うのがあったんだ。「多摩地区で俺たちは孤立している、企業内組合と同じだから」と圧倒的多数が賛成に回った。だから「行政学会印刷に負けたな」とみんなで言ったんだよ。

一杉浦さんはどういう態度でしたか？

嶺岸 あん時は、すごく怒っていたのを覚えてるよ。「ここで何で個人加盟を無くして、小さなとこまで単組織にしなきゃいけないんだよ。今まで作ってきた財産を投げ捨てるのか」とカンカンになって怒っていたよ。

一解散問題が出たのは東京だけなんですか？

嶺岸 京都や大阪あたりでも「なんで個人加盟を無くすんだ」とえらくもめたそうですよ。大阪にも札幌にも個人加盟組織があったからね。京都の場合は組織率が高く、民主府政（蜷川知事）で全国的にも影響があつて、一気に進んでしまった。

一全印総連の中のグループの意思統一で進められたという話ですが、他の産業の個人加盟組合はどつなつたんですか。金属などの場合は、全金自体が個人加盟の組織形態を採っていましたけれど。

嶺岸 七一年に提案され時には、印刷の他に商業、自交、医療などにも提案されました。六四、五年ころから、個

人加盟組合の交流会というのがあった。良い交流会で、とくに私学と全商業、医療の活動報告が教訓的でしたけれど、その人たちの言うのには「もともと印刷の人から学んだ」と言っていましたよ。この交流会では、いろいろ企画があつて、二千、三千名を集め、船を借り切って船上パーティー、大島での海水浴なんかもやったんだ。

一交流会では、全商業の「マルゼン」が「個人加盟でどんどん増えています」「何々営業所では何人増えました」なんて話が出て、「ああ、すごいな。月賦はマルゼンで買わなくちゃ」なんて話が出た。それでわざわざ、レインコートを買に行ったら組合員がいて、「いやー」と言いあつたよ。

それが、七一年の秋の交流会の時には、一斉に「解散しなけりゃいけないんだ」みたいな話ばかりだったね。私学なんかも教祖に一本化すればいいんだとか、と言うようにね。交流会全体では「無くすべきではない」と「なんで俺たちがここで解散しなけりゃいけないんだ」と言う意見があったけど、それぞれの産業別組織ではやられてしまったんだ、一斉にね。

その全商業は、解散提案が大会で否決され、役員が辞職したんだ。

一「数こそ力」といって個人加盟組合が解散したのだから

「数」、組織化は進んだんですか？

榎岸 いや、全然だめで萎んでいくばかり。企業内組合もどんどん減っていくばかりだったですよ。企業規模が縮小したり、吸収合併したり、あとは移転したりするからドンドン無くなっていた。

一技報堂なんかもそうでしたね。

榎岸 あそこは、会社がなくなる前に組合が無くなっちゃったんだよ。虎ノ門、溜池に行ったときには五人くらいになって、それも定年間近の人ばかりだった。それだから自動的に無くなっちゃった訳よ。それで何年かしたら会社も解散になった。

《めぐろユニオン結成のかかわりは》

一九七七年の企業閉鎖による分会解散後のめぐろユニオン結成と活動の様子は？

榎岸 私たちのような企業席のない活動家の結集場所と未組織労働者を組織すると言うことで、労働共済の創設者だった川又さんの協力を得てめぐろユニオンを結成したんだ。

とにかく、組織化の訴えを、と言う事ですね。区内全域を対象とするチラシの各戸宣伝、今も続いている駅頭宣伝で、労協の行動の一環として、仲間の協力を得て進めました。また、ユニオンの友の会を組織し、財政的にも、

行動の上でもその中心になってもらいました。最初にピラを見て入ってきたのが、小林さんと言う年配の労働者だった。彼は面白い人で、「昔、祐天寺の駅前で鈴木茂三郎とか、徳田球一の選挙演説を聞いていた。それで一度は組合費と言うものを払ってみたかった」と、入会理由を言っていました。職場の詳しいことは言いませんでしたが、子供たちのアメリカンフットボールの手伝いをやっていたそうです。つい先日亡くなりましたけど。初代の事務局長は榎引君で、彼は労協の分裂問題直後の事務局長をやりましたが、課長の声が掛かって、不本意ながらそれを受けて労組役員を辞めざるを得なかった。それで、めぐろユニオンに入ってきたんだ。

《徳留保夫氏の略歴》

一九四一年（昭和一六年）五月 鹿児島県に生まれる。

一九六〇年（昭和三五五年）三月 鹿児島県立出水実業高校

建築科卒し、上京して目黒の日本電気文

化工業入社

一九六三年（昭和三八年） 民主青年同盟に加盟、同年共

産党に入党

全金目黒地域支部電文分会結成

一九六五年（昭和四〇年） 会社倒産

一九六七年（昭和四二年）年末 組員五名で会社（共電）

設立

一九七八年（昭和五八年） 共電を退社、一九八八年まで

出雲電機工業へ

一九八八年（昭和六四年）（有）テクノデバイス設立し、

現在に至る

（この聞き取りは二〇一二年五月に行われた学習会の席上での発言をまとめたものです）

一徳留さんは青年運動、民青との繋がりで地域にもつながりを多くもっていたからそのへんを思い出して話してもらいたい。

徳留

最初は六〇年代は、労音が盛んだったのでサークル活動をやっていて、あの頃は民青が千人くらい居て、民青だけで品川スケート場を借り切って千人くらいを集めたこともあった。今思うには、あの頃は大衆組織との交流とか共闘があった。

今も中川英治さんとも年に二回くらいは会っているけど、あの頃から続いている「はぐるま会」が今も在って年に二・三回は一二・三人くらいは集まっている。昔の民青の人達も年に同じくらいは集まり、新年会をやったり旅行に行ったりしている。

はぐるま会に、この編纂会から申し入れがあったらしいが、どういう目的で作るのかと言うことで積極的ではなかった。この歴史を作るのは良いが、昔を思い出すだけで、ノスタルジーにしたるだけの歴史書でなくて、これをどう活用するかという議論をやって、昔と状況が変わっているから、昔とどこが変わって、これからどうなっていくのかを、これをもとに議論してほしい。

昔は我々が要求して勝ち取る立場だったが、今は要求しないのに無理に買わされている。生活環境も変わり、労使関係の在り方も全く変わってしまった。

六〇年代は資本もまだ弱かったが、労働者は戦争から解放されて、みんな要求して取っていく勢いがあった。

昔は時間が余っていたからサークルに行くとか交流とかあったが、今はゲームや携帯電話やテレビなど押し付けられているから、時間をつぶすことはいくらでもあるからサークルに誘っても来ないとか集まらないとか状況が変わってしまったている。

労使関係が変わって、今は圧倒的に資本側が強くて、全てを政治もなんでも金で動かしている。そこをどう変えていくか。昔、労働者は無産階級として失うものは何もないから、いざという時には立ち上がるといふ気骨を持っていたが、いまの労働者は満たされていないが、立ち上がらない。

ヨーロッパではあれだけ集会やピケをやったりしているのに、日本ではなぜ出来ないのか。日本人の資質の違いがあるかもしれないが、七〇年代にケネディー・ライシャワー路線として、資本側はずっと系統的にやってきていて、連合を作り以前は総評と同盟があつて路線の対立があつたが、今は連合があつてもあれは労働組合なのか分からない。賃上げも出来なければストも出来ない、そういうのが労働組合なのか。連合は、資本を擁護する組織となつてしまつて、連合そのものが首切りを認めるとか、人員整理を認めるとか、という感じで、本来労働組合は労働者の生活を守るんだということで労働組合に

入つた。今連合に入つたら、守られるのか、非正規労働を認めるとか、そんな存在になつている。

その辺を掘り下げて、我々はこれからどうやつたらいいのか歴史を基にして、こういうことを議論して、学習会もこれからどう活用していくか。昔との違いは何なのか、これからの日本はどうなっていくのか、そういうことを見越してやってみないと、マクロ的に世の中はどう動いているのか見えない。

今はネットで世界が繋がつていて、昔は個々にでも闘えばそこだけでも解決出来たが、今は全体が見えないとアツという間に情報が全世界に伝わってしまう時代で、必要以上に情報が入り過ぎていて、それに惑わされて、資本側はマスメディアをフルに使つて売り込み、全てを支配している。これから我々がマスコミに対抗できないとなかなか資本に太刀打ち出来ない。

労働組合はもとよりさまざまな大衆組織や幅広い市民とも連携し統一戦線を模索する時に来ているのではないだろうか。

